

新進作家叢書

—40—

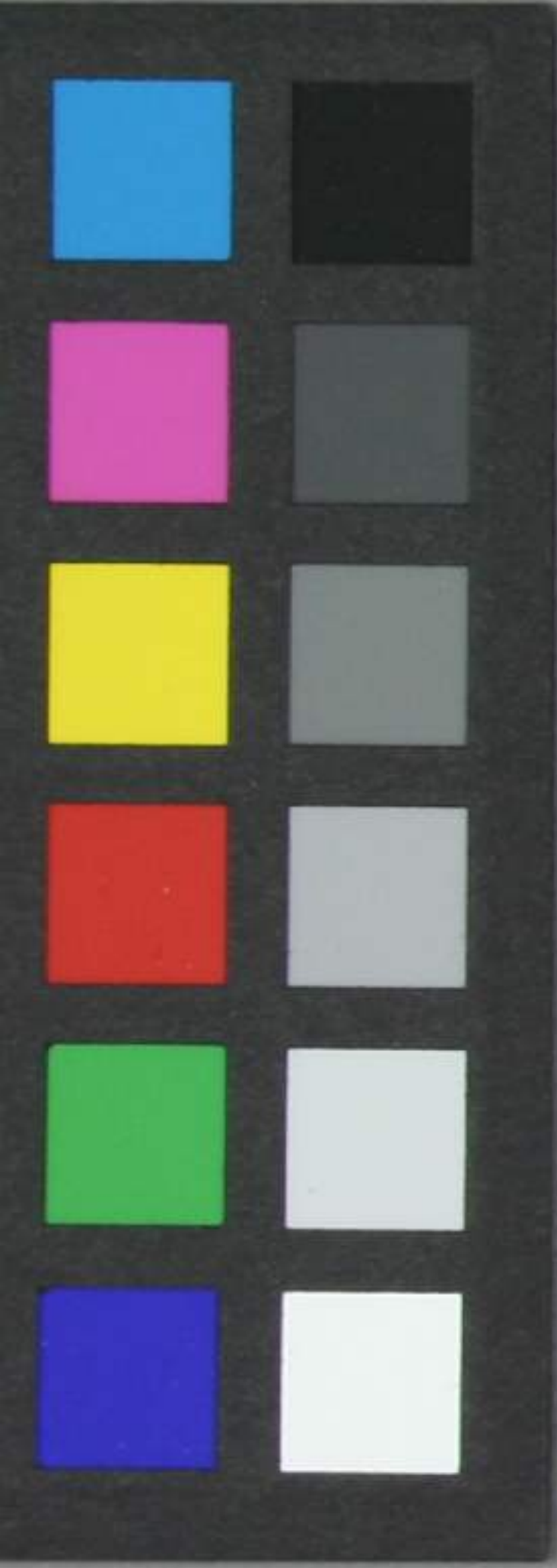
父を賣る子

牧野信一 著



新潮出版社

1924



父を賣る子 牧野信一著



新進作家叢書(40)



久米正雄様

大正十三年八月

牧野信

—

■新進作家叢書 (40)

新潮社
出版

父を賣る子

牧野信一著

目 次

熱 海 へ 一

スプリングコート 二七

父を賣る子 二八

渚 二八

鞭 撻 一〇三

或る五月の朝の話 一〇九

公園へ行く道 一二三

熱

海

ノ

彼は徳利を倒さかにして、細君の顔を見返つた。

「未だ！」周子はわざとらしく眼を丸くした。

「早く！それでもうお終ひだ。」特別な事情がある爲に、それで餘計に飲むのだ、と察しられたりしてはつらかつたので、彼は殊更に放膽らしく「馬鹿に今晚は寒いな。さつぱり暖まらないや。」と付け足した。だが事實はもう餘程酔つてゐたので、嘘でもそんな言葉を吐いて見ると、心もそれに伴れて、もつと何か徒いたづらなことでも云つて見たい氣がした。けれど、母も周子も、手際よく顔付きだけはごまかしては居たが——それは一層彼にしては堪らない同情のされ方で、普段ならばもう大概母が斷わる頃なものにも關はらず、

「全く今晚は寒い、ひよつとすると雪かも知れない。」など、云ひ乍ら母は酒の爛をした。「もう今日で五日位ゐになるかしら、お父さん？」と周子は彼に云つた。彼と母ではこれ位ゐのことでも口には出せなかつた。

「さつきの電話の様子ぢや黒川さん達はゆうべお歸りになつたらしいぢやないか。」斯う答へただけで彼は、母に間まが悪かつた。「それとも、また別の用でも出來たのかしら！」
「丁度五日目になる。」と云つて母は横を向いた。

母も彼も、父が何をしてゐるか知つてゐた。だが二人の間では父を非難するには「仕事」にかこつけるより他はなかつた。「大損をしゃアしないかしら。」とか「何處の男とも知らない人間など、イ、氣になつてつき合つてゐて、後で欺されるんぢやないかしら。」など、云ふ言葉を用ひるのだつたが、時には彼ですら母が餘り言葉を妙な處に避けてゐるのに擦つたくも思つた。「私の手前もはぐからず……餘り口惜しいことだ。」一層斯う云つて了ふ方が正直で清々しやアしないかなど、思ふこともあつた。だが周子の云ひ方は、母や彼の顔をあかくさせることが多かつた。

「此頃忙しいことは確かだ。だけど斯う家をあけるのはよくない。」彼は、いかにも分別あり氣にそんなことを云つた。

「あなただつて此間、日歸りだと云つて東京へ行つて五日も歸らなかつたぢやないの。」

「俺とはわけが違ふ。」と彼は苦々しく云つた。

「違はないわ。同じわけよ。」

「俺は、そんなこと……」彼は、母の前であることが堪らず、唇を嚙んだ。「俺は……馬鹿ッ……。」と彼は周子を睨めた。

皆なが暫く黙つた時、彼は赫ツとして、

「親父の馬鹿ア！」と怒鳴つた。皆な驚いて彼の顔を視詰めた。「よしッ、俺がこれから迎ひに行く、お客様なんてあつたつて何だつて關ふもんか。」

「あなたのお迎ひは駄目！」母が云ふのだつたら未だしも彼は好かつたが、周子が「自分が一處になつて遊びたいもので、駄目くくく」と云つた。

「何てエ馬鹿だらう此奴は、……誰がそんな呑氣な氣でゐられる、ほんとに拳固だぞ。」と彼は無氣になつて怒つたが、一寸周子の懸念が自分でも感ぜられた。

「あんなに酔つてゐる。」と周子は云つた。尤も彼は、母の前で斯んな酔態を示したことはなかつた。

「迎ひに行きますよ。」彼は一寸開き直つて半分は周子を壓迫するつもりで母に云つた。

「今になつて斯んな苦勞をするなんて……。」と母は下を向いて口のうちで呟いた。彼は、わけもなくゾツとした。

「ハハハ……何も苦勞ツてエ程のことぢやありやアしない、……別に……苦勞なんて……」彼は鷹揚な手つきで切りに盃を口に運んだ。さうして彼がそつと母を窺つて見ると、明る

い電燈の光りに遮られて自分の眼もイヤにチカチカとまぶしかつたが、確かに母の睫毛に光つたものを見とゞけた。彼は、また慌て、今度は無茶苦茶に盃を傾けた。

彼の酔態が緒口になつて他の者の感情がほころび始めたらしかつた。だが、彼はさう思はなかつたので、相手のしぐさばかりを冷いつもりの眼で眺めるのだつた。「これはちよつと堪らない、泣くなんて酷い、これでは周子と大した差異はありやしない。」彼はそんなことを想ひながら、ぼんやり母と周子を見くらべたりした。

「お母さん、もう一杯飲まない。」彼は何も氣にしてゐないことを見せかけた。すると母は袖で軽く眼と鼻とを壓へてから、兩方の手の先で盃をおさへて差し出した。芝居沁みてる、など、思ひながらも彼は妙にホツとした氣易さを覺えた。——一層斯うなれば、此方も……そんなことが考へられた。

「あなたもう酔つてるわよ、もうお終ひになすつたら——。」さすがに周子も氣詰りを覺えたらしかつた。

お前から見たらさぞ可笑しい情景だらう、だがもう關はない、遠慮なく笑つて呉れ、うんと皮肉な眼で此ののだらしのない母と子を觀察して呉れ、これから俺がもつと際どい芝居

を演じて見せてやるぞ——彼は、益々酔つて来る自分の頭を感じながら、ひとりひどく六ヶ敷い顔で、何か感慨に堪へぬやうな格好をしてゐたが、腹ではそんなおろかな考へにふけてゐた。

「俺どうしても迎ひに行つて来る。」彼は、ひとは自分のテレかくしで、如何にも如才なく母の氣持を察してゐる者のやうに云つた。

「駄目、そんなに酔つて」周子が云つた。母は黙つてはゐるが、彼の見たところでは明らかに肯定の氣色だつた。

彼は、まつたく涙ぐましくなつた。さうして自分で自分を煽動して、勝手に勇ましい義憤を抱いた。——反つて氣輕さを覺ゆる程の、興奮を感じた。

「お父さんのだらしないのはあきれた。お前だつて此頃こそ——。」と云ひかけた母は傍に周子が居るのに氣が附いたもので、此頃こそおとなしくしてゐるが、と云はうとしたのを遠慮して「お前もお父さんに氣質がそつくりなんだから、しつかりしなければ——。」と云つた。

自分のことは棚にあげて、母にのみ媚びるが如き、丁度自分の嫌ひな友達を他の友達の前

で惡態あしざまに非難して、甘い同感を購ひ、卑怯な満足を覺ゆるといふやうな、内容の伴はぬ彼の自惚れを母は彼に感じたのかも知れない、彼はこの時ピシリと鞭打たるゝ痛さと恥しさとを覺えた。それにしても彼は、もう母が此方を訓めることに依つて自らの鬱憤のはけ口にしたのかもしれない——などゝ邪よこしままな考へを抱いて苦く思つたりした。

「そんなにいけなかつたんですか？」周子は直ぐに淫蕩的な眼を輝かせて母に詰つた。母は、たゞ苦笑してゐた。その苦笑で周子が何れ位ゐな程度の想像を廻らしたらうか——彼は斯んなに考へて一寸迷惑した。

その時突然奥の部屋で古い蓄音機が甲高い聲を張りあげたので、皆なが一齊に言葉と氣持とを壓へられた瞬間、その蓄音機の干からびたやうな音は「ひいるもようるもだいてねて——。」とイヤに氣味悪くも鋭く家中に鳴り響いた。正月で遊びに來てゐる子供達の惡戯だつた。

「あんなものやつてゐる！」と周子が云つた。

「誰があんなのを買ったんだらう！」母は首をかしげた。

周子は、あかい顔をしてゐる彼を指差した。周子は彼に何か憤懣でもあるやうに酒々と

して、さうして今の蓄音機の音のやうにヒステリックな調子で、

「鍵の掛つてゐる本箱の抽出しを妾が此間あけて見ましたらね、あんな風な歌とか浪花節とか云つたやうな下品なものばかりが一杯藏つてありますのよ。大切さうに藏つてあるの
で、妾は屹度大事な外國の音楽のかなんぞと思つたら——。」と云つた。

「何云ツてやがるんだい、馬鹿ア。」彼は噁しく怒鳴つた。周子に限らず彼が怒つてその威
嚴の通つた驗しは一度もなかつたが、この時は一層周子は平氣だつた。

「何です、その口の利き方は——。」嚴格がりの母は、直ぐに彼を叱つた。——嚴格もいゝ
が今度のやうな場合には困ることが多からう——彼はそんなに思ひながらフラフラと後架
へ行つた。

「いつでしたか、彼方の家へ勉強に行くんだと云つて行つてゐた時にね、妾が何か用事が
出来て行きましたのよ。行つて見ると蓄音機なんて鳴つてゐるので妾障子の隙からそつと
覗いて見ましたら、さうすると、まアどうでせう……！」と尙も周子は續けた。「獨りでお
酒なんてチビチビ飲みながら、何だか妙な歌をかけて、それをまア繰り返し／＼かけて、
加けにね、變に首なんて振りながら自分もそつと口のうちに歌に合せたりしてゐるんです

よ。屹度遊びに行つた時に歌はうと思つて習つてゐたに違ひありませんわ。」

「まア——」と母は顔を顰めた。「それから？」

そこに彼はだらしなく胸をはだけて、フウフウと荒い息を吐きながら入つて來た。奥で
は「軍艦マーチ」が鳴つてゐた。母は父の事が氣に懸つてゐる爲か、周子が何と告げ口し
てもそれ程動かぬらしかつた。

「ともかく出かけるよ。」

「止した方が好い。」と母は云つた。

「遠慮することはない。なアに、僕が行けば——」今度は殊更に彼は「僕」と云つた。「僕
は大丈夫だ、ほんとうに嫌ひだ、あゝいふ處は。周子も何もない。全く嫌ひなんだ。馬鹿
な……チエツ！ そんな閑があるもんか。」

彼がわけの解らない事を喋り始めたので、母と周子は堅く彼を視守つた。

「あんなに閑な癖に、何云ツてるんだらう。」と周子が云つた。威勢好く立ちあがつた彼は
何か口のうちにブツブツ小言を云ひながら胡坐に返ると、「ふざけるない。」とか「ヘッ！
馬鹿らしいや。」とか「何も彼も滅茶滅茶がいゝ、そんならそれで俺も好きだ。」などいふ

断れ断れな文句が彼の肩から洩れてゐた。

「ほんとだ。滅茶滅茶が好い、皆なで勝手氣儘に面白いことばかりした方が好い。」と彼の耳に聞えたのは、たしかに母の聲だった。

「ハッハッハ……。」彼は一刻前と同じやうに仰山に笑つた。「滅茶滅茶は困る、やりきれないよ。第一、ねお母さん、自分勝手に面白いことをするツて、一體それは如何いふ事なんですか。たゞ面白い事だけぢや解らない、具體的に説明して貰ひたいものだ。」

「あなたは何をツ！」周子は疝癢を起して彼の背中を強く打つた。

「酔ツばらひは駄目！」と母は云つた。

「いや駄目ぢやない。俺は決して無稽な事は云はん、變な興奮もしないよ。」

母と周子は寄り添うて何か内證話を始めた。彼は未だ切りしきりに何か呟いてゐたが、不意に電話口に立つた、彼を止めようとした周子は彼に突き飛ばされて、唐紙にドンと當つた。

「何？ 居るツ！ 居るなら居るで好い、一寸お待ち下さいとは何だい、狸奴！ 俺がこれから行つてウント酒を飲むからツて親父にさう云つておけ。」

「あなた何云ツてるんですね、みつともないわよ、もうとつくに電話は切れてゐますよ。」

「早く俵をお呼びよ、さうしてお前も一處に行つておくれ。」母は慌てゝ周子に云つた。

翌朝、彼は十時頃眼を醒した。

「七草で今朝はお粥よ。」と周子が云つた。縁側には飴色の陽が深くさしてゐた。其處に座蒲團を二枚敷いて、一枚を二ツ折りの枕にして父は、口をあけてぐつすと鼻をかいて眠つてゐた。

其處を避けて、彼が通つた時周子は「あらあら、お父さんはまア、こんな處で日和ぼつこ？」と云ひながら毛布を掛けてゐた。「可哀想に、昨晚のお疲れ！」

彼が顔を洗つてゐる傍に周子は來て、

「あたま痛くない？」と訊いた。

「痛くない。」

「丈夫だわね。」

「あれはどうしたんだ。」庭の隅の物干に彼の羽織と着物が干してあるので、彼は訊ねた。「ゲロ！」と云つて周子は顔を繋めた。

「ほう！」彼は、つまらなささうに、でも一寸眼を丸くした。

「お父さんも——」と周子は云つた。もう少し此方を見て見ろ、と云はれたので彼は窓から首を出して見ると、彼の羽織に並んで、父の羽織、着物、袴、メリヤスの股引、白足袋などがズラリと干してあつた。

「あなたが悪いからよ。」周子にはがわらひした。「あなたが行くまでお父さんは餘りお酔ひになつてはゐなかつたのよ。それをまア、あなたツてば無理に——あなたが無理に飲ませたやうなものだわ、よくお父さんはおこらないと思つて妾感心した。」

殆ど記憶もなかつたが、さう云はれて見ると、彼はだんだんに顔がほてつて來た。

「お父さんがお妾を置かうとどうしようと、それにあなたが出しやばるなんて、全く鼻持のならない事だわ。妾が堪らなかつた。」

「よせ、よせ。」彼は鏡を眺めながらセツセツと齒を磨いた。

「お母さんは今朝早く松を伴れて熱海へいらしつてよ。」

「ほう！」

「お母さんにだつて、さうだわ。あなたが悪いのよ、何でも變な風にはかしお父さんのこ

とを云ふんですもの。」

「お母さんが氣が早いんだよ。」

「嘘！ あなたがたきつけるんだ。」

「止せばいゝのに、熱海なんてつまらない。」

「具體的にしたのよ。」周子は斯う云ひ棄てゝ行つて了つた。彼は、自分が前の晩に喋つたことは忘れてしまつて、

「變な奴だなア！」と呟いた。

彼が茶の間に入つて來た時には、父は火鉢の前に憤つてゝも居るやうに口を尖らせて、かしまつて坐つてゐた。

彼は、黙つて膳の前に坐つた。一體父と彼とは酒に酔つた時でない限り殆ど言葉を交さないのが習慣だつた。少し位用があつてもお互に母か周子を通して済した。面とぶつかつては彼は「お父さん」などゝ呼び掛けたことも無い位だつた。互ひに憤ツとした顔をして、決して視線を合せなかつた。——それが酔つた場合になると恰で親しい友達か何かのやうに盛んに喋り出すのだつた。さうして翌日になるとガラリと打つて變り何も知らぬ

顔をしてゐるのだつた。「随分珍らしい親子だ、こんなのが他所にもあるかしら。」周子などは驚いて彼に云ふのだつた。

彼が黙つて茶を啜つてゐるのを見て周子が、

「御飯直ぐあがる？」と云つた。

祖父の代には七草の朝は、皆な揃つて早朝に起きて元日のやうに祝儀を述べた。それから代る神棚の下に坐つて、稱へ言を云ひながら臺の上の七草をしやもぢで叩いた。――彼がうまれて間もなく父は外國に行き、彼が十三の時かへつた。

祖父は彼が十の時死んだ。

「お父さんは如何？ 七草粥。」彼が黙つてゐるうちに周子がまた云つた。

「御免だ。」

「少しでもあげなければいけないツて、お母さんがおつしやつて行きましたわ。」

「まア、いゝよ。」と云つて父は腕組をした。

「それから七草を爪につけないと指の怪我をするんですツて。」

「お酒を持つてお出で。」と父が云つた。

「あなたは？」周子は彼に訊ねた。

「今朝は厭だ。」彼は新聞を眺めた儘で云つた。

「一杯飲むと反つて氣持が好くなるものだ。」父も新聞を眺めた儘、獨白のやうに慌てゝ云つた。彼は、聞えぬ振をしてゐた。

周子が三本目の酒を持つて來た頃には、父と彼はいつの間にか火鉢を挟んで大胡坐で、大きな口をあけて笑つたりしてゐた。

「お父さん大丈夫なの。」と周子が訊ねた。

「阿母が居ねエとせいせいといゝ。」と云つて父は笑つた。

彼もたしかにそんな氣がした。

「厭なお父さん！ だけど此間中から餘りお酒が續くから、またお體が――。」

「つまらねエ心配するな。お前だつて阿母が居ない方がいゝんだらう、えゝ！ おい？」

「妾、お母さんの方が好きよ。」

「アッハ……、嘘をつけ！ お行儀もへつたくれもあるもんか。」

「俺、ゆうべそんなに酔つたかしら。」うっかり彼は周子に訊ねた。いつの場合でも父と彼

とは斯う云ふ回想的な言葉を出した験たましがなかつたので、父は大變間まが悪さうな顔になつて、
「そんなこともなからう。」と云つた。

「二人とも可成りだらしがなかつたわよ、だつて……」と周子が續けやうとすると、

「いゝよ、もう止せ。」と彼は一寸眞面目な顔をして手を振つた。廻り舞臺のやうに他愛も
なく、一刻前の態度と反對になつて了ふのを思ふと、いつでも彼は一寸恥しさを覺えた、
さうしてそれを紛らす爲にまた飲んだ。

「俺が道樂でもすると思ふのは、厭になつて了ふ。阿母の奴、第一みつともなくつて堪ら
ない。えゝ、おい、さうぢやないか。」

「さうだね。」と彼は云つた。

「まつたくだよ。俺のやうな爺がさ、五十一歳だぜ。そりや俺が家をあけるのはよくない、
だが仕事となれば仕方がないよ、さうだらう？」

「それにしても此頃はまた馬鹿に仕事が忙しいんだね。五十一歳で年寄がるのは少し狡い
ね。」

「ハッハ……。まアいゝさ。だが此頃仕事が忙しいのは確かなんだぜ、そりやアお前だつて

解つてゐるぢやないか。」

「無論解つてゐる。」

「ちつとは大眼に見て貰ひたいもんだ。」

「俺は別に何とも思ひはしない、少しは困る場合もあるが、なアに、それだつて別に——。」

周子は彼を憎々しさうに睨んだ。

「阿母は一寸ヒスだね。」

「少し……。」と彼は云つた。

「そんな馬鹿なことはありませんよ。お父さんとあなたがいけないのよ。第一それぢやあ
なたは卑怯だわ。」

「憤おこらないでもいゝよ。でも周子、お前昨夜はよく來たな。どうだい、お父さんが藝者に
惚おぼけてゐたところは、どうだ。……驚いたか。」

「お父さんはしつかりしてゐたわ。お迎ひの人の方がいけなかつたのよ。妾もうあそこに
ゐた藝者さん達に氣の毒で堪らなかつた。だつてさ、入つて行くといきなり腕をまくつて、
やい不見轉みぎてん藝者！ なんて怒鳴るんですもの。」

「そんなことを云つたかしら。」と彼は云つた。
 「それからが酷いのよ。眞似も出来ないわ、あんな下品な……お尻をまくつて胡坐なんてかいて、——やい俺は親孝行なんだぞ、藝者なんてまごまごしてゐると張り飛すぞ——だつて。」

彼は、ゾツとして思はず首を縮めた。

父は下を向いて苦笑しながら切りに飲み續けた。

「それが、もつと體格でもいゝんなら兎も角、ちんちくりんの瘦ッぽちでさ、加^{きま}げにだぶだぶに延びちやつてる股引がイヤにすりこけて、あんなものはいて行かないがいゝのに。」
 「格好は兎も角、そんなことをしては——。」彼は小さな聲で云つた。

「當り前さ、威張ツたりすればする程可笑しかつた。」

「當り前だ。」と彼も云つた。

「お父さんの顔に觸るわね。」と周子は父の方を向いて云つた。

「顔もくそもないさ、鬨^{はな}ふもんか。」と父は云つた。

「それにあなたは一寸泣き上^{じやうこ}戸ぢやないか、昨夜も終ひに其處で泣いたわよ。」

「嘘をつけ！ 誰が泣いたりなんかするもんか。」出来ることなら彼はその身を蠟燭の灯かなんぞを吹き消すやうにして了ひたかつた。「何しろ酷く酔つて了つて、何も知らん。」

「昨夜の藝者をひとつ皆なこれから家に招^まぼうか。」突然父がさう云つた。

「冗談ぢやない。」彼は慌てゝ口走つた。

「なアに阿母の居ねエ時は何をしたつて鬨^{はな}ふもんか、家^{いへ}なかでぶツ、騒げ！」

「俺、藝者は嫌ひだ。お父さんのさういふ趣味も嫌ひだア！」

「趣味もくそもあつたもんぢやない。——俺だつて勿論藝者なんて嫌ひだが——。」

「さう一概に嫌つたものでもないが——。」

「もう酔つて！ あなた何云ツてるのよ。」

「おい、周子しつかりしろ、此奴は口でこそ何だか譯のわからないことを云ふが、なかなかうつつかりしてゐられないんだよ。」

「それより俺は金を少し貰ひ度い、もう一ト月ばかり一文なしだ。」

「うん、やるよ。くよくよするねエ。」

「今すぐに貰ひたい。」縦令父が承知してゐても酔が醒めた時になると、お互に金のやりと

りが氣拙くなつて、其儘お流れになることは屢々なので、それを慮つて彼は斯う云つた。
 「弱味を付け込みやアがつたな、チヨツ、まあ仕方がない。」さう云ひながら父は、鞆を取り寄せて、急に冷たく落着き拂つて小切手に判だけ捺すと、お前書いて呉れと云つてそれを周子に渡した。

「周子に着物を買つてやつて呉れ。」父は、一寸傲然として云つた。

彼は、何れ位ど金を呉れたのか氣に懸つたが、努めて白々しい態度を取つてゐると、だんだんに心がイヂけて來るやうな不快を覺えた。

「周子も一處に伴れて飯でも食ひに行かうか。」

「家の方が好い。」と彼は云つた。

「家で飲んでるのも好い、周子、お前に何か御馳走しようぢやないか。」

「何も欲しくありませんわ。」

「おい、純一！ 藝者を呼べよ、家ン中で踊りを踊らせて見ようぢやないか。」

「お止めなさい、あなた。」彼に一寸動きが見えると周子は強く遮つた。「お父さん、家ン中だつて斯んなに散らかつてゐるし、それに皆な斯んな風つきで——第一近所が……」

寒いもので毛糸のシャツを二枚重ねて、何を間違へたものか羽織なしで、彼の木綿の綿入を着込んでゐる父は、

「散らかつてゐたつて何だつてかまふもんか。」と威勢よく腕を舉げた時自分の着物でないのに氣付いたらしかつた。

「お父さんシカゴ大學は立派？」話題でも變へさせるつもりか周子は突然そんなことを訊いた。

「どうして知つてる。」父が困つたらしい顔をしたので彼が云つた。

「此間、履歷書を見たわ。けどお父さんは何故もつとハイカラぢやないんでせう？」

「古い事は駄目だよ。」父は笑つて云つた。

「けどお父さんは随分酷い人ね、この人が三つの時ひとりで行つたんですツてね。お母さんから聞いたわ。」

「だから今もつて阿母に頭があがらない。ほんとは俺日本には歸らないつもりだつたんだよ。……」

彼は、寂しいイヤな氣がした。グロテスクな不愉快を覺えた。つい此頃になつて初めて

彼だけが知つた未だ見たこともない混血兒の妹のことなぞ考へた。

三三

「ハーンとパツサノは今年も僕にクリスマススのハガキを呉れましたよ。」さう彼は云つた。父は、テレたやうになつて後架へ立つて行つた。彼は冷く父の後姿を眺めた。どんな意味でも小説のやうな事柄は自分の周囲には決して無い如く思つてゐたのに、滑稽な程様な然も不快な事があるらしい。——彼は斯んな風にぼんやり考へたりした。そのうちに彼は、斯うして坐つて、何かいろいろなことを考へたりしてゐる自分自身の存在といふものが、極めて不氣味な存在のやうな氣になつて、終ひには妙な恥しさを覺えた。

「今日は酔つては厭よ。」と周子は彼に云つてゐた。

障子をすつて何か拙い歌を歌ひながら戻つて來た父は坐りながら「正月だからいくら酔つたつて近所だつて何とも思やしないよ。」と云つた。

「うんと酔ふ。」と彼は憤つたやうな調子で云つた。

「阿母だつていゝだらう。執海へ行つて湯にでもつかつてゐれば——。」

「餘りよくもないだらう、あんな處に獨りで居たつて面白い筈はない。」彼は云つた。父はもう酔ひ過したらしく横になりかゝつた。

「一本宛ぢや面倒だから、五六本かためてお酒を持つて來ウよう。」と彼は怒鳴つた。

「出掛けベエ〜、皆なでおしかける。おい周子！ 山崎の爲吉さんも呼べ。」父は起き上つて云つた。

「駄目です、あんな酔つばらひ。」

「何云つてやあがるんだい。阿母の云ふやうなことを云ふない——ハハ……。」

「いや、もうお父さんは止めた方がいゝ。また體に悪い。——俺が獨りで飲むんだ、俺獨りで酔つばらひたいんだ。何だい〜。」彼は急に大きな聲を出して、力み始めた。さうすると頬のあたりがムツ痒くなつて、危く涙がこぼれさうな氣がした。

「また始つた。」周子は唇を嚙んだ。——が努めて靜かな調子で「いくらお酒を飲んでも關ひませんよ、だけど靜かにして下さい。妾ひとりで困るわ。」と涙聲をした。そして再び氣を取り直して「いくら飲めたつてちつとも偉くはありませんよ。ね。また昨夜の二代目ぢやお父さんも困るし、妾も困る。お酒を飲んだら永島さんのやうに琵琶でもやるとか、三郎さん達のやうに歌でも歌ふとか、踊つてもいゝ——尤もあなたには何も出來ないんだからお氣の毒だけれど、憤るのは駄目々々。」

彼よりも五つも年の若い周子が、一生懸命になると仲々の能辯で、こんこんと彼に云ひ聞かせた。彼は、顔をあげては涙の落ちるのが氣遣はれたので、子供のやうに下を向いてゐた。

「周子、いゝよ、鬨はないよ。酔つてくれば誰だつて同じものだ。何を云つたつて差支へないさ。酒飲みはそれが楽しみなんだ。」さう云ふ父の聲が微かに彼に聞えた。

「別に楽しみでもない。」

彼はうつ向いたまゝで云つた。——父が家をあけると家中が陰惨でいけない。自分としても實は不愉快で堪まらないんだ、兎も角、家にだけは歸つてもらはないといろ／＼な意味で困ることが多い——斯う云ふ意味のことを彼は云はうとしてゐるのだつたが（前の晩もさうだつた。）どうしても言葉のきつかけが出て來ないのだつた。無暗と胸が迫つて來るばかりだつた。

「何處かへ出掛けよう。家に坐つてばかりゐたつて仕様がなから。今日一ン日お前達につきあふよ。明日からはまた客が來る筈になつてゐるんだから。」

「それぢやお父さん、活動寫眞へ行きますか。」

「活動か？ 行つてもいゝ。」

「俺は厭だ。」と彼は強く云つた。

「活動も馬鹿げてゐるな。」

「だつて他に行くところ無いわ。序でに妾は、パーロウのレコードが誂へてあるからそれを取つて來たいの。」

「熱海へ行かう。」

突然思ひついたやうに彼が云つた。

「お母さんどこ？」

周子は意外らしく眼を視張つた。

「うむ、さうだ。」

「お父さんは？」

「無論行くさ／＼。」彼は、父が返答をしないうちに、おしつけるやうに云つた。「用があれば明日お父さんだけ歸ればいゝでせう、だが稀にはお客をすつぽかしたつていゝさ、お正月だもの。」斯う云ふ場合だと、何んなことでも厭だと云へない父の性質を彼は知つてゐた。

「さあ行かうく、支度だく。」彼は云ひながら元氣よく立ちあがつた。——たつた今の興奮の切なさが、一層堅く胸の真中にジツとたゞずんでゐた。——周子の云つた通り、此奴は若しかすると泣き上戸じやうごとかいふ病ひかも知れないぞ——彼は、さう思つた。

(十二年五月)

スプリングコート

丘を隔てた海の上から、汽船の笛が鳴り渡つて來た。もう間もなくお午だ——彼はさう思つただけで動かなかつた。いつもの通り彼は、まだこの上一時間か二時間はうとくして過す筈だつた。日が射してまぶしいもので、頭からすつぽりとかひまきを被つたまゝ凝どろと小便を泳へてゐた。硝子戸も障子も惜し氣なく明け放されて、蟬が盛んに鳴いてゐた。「もう暫く眠つてやれ。」

彼は、たゞさう思つてゐた。

丁度彼の首と並行の何の飾りもない床の間には、雑誌ばかりが無茶苦茶に散らばつて、隅の方には脱ぎ棄てた儘の汚いコートが丸まつてゐた。

汽船の笛が、また鳴つた。子供の頃彼は、この笛の音では随分厭な思ひをした。寫眞だけでしか見知らない外國に居る父のことを想ひ出すのだつた。——その頃の遺瀨なかつた氣持を、私は現在でもはつきりと回想することが出來た。

彼は枕に顔を埋めて、つい此間もう少しで殴り合にさへならうとした位野蠻な口論を

した父を思つた。

「ヤンキー爺！」

彼は、そんなに呟いて思はず苦笑した。肚では斯んなに輕蔑したり、また母や細君の前では一ツ端の度胸あり氣な口を利くものゝ、いざ親父と對談の場合になると鼠のやうに縮みあがつてグウの音も出ないのである。

彼は、偶然ずつと前から自分に混血兒の妹があるといふことを知つてゐた。無論、それを知つて以來もう五六年にもなるが妹を見たこともなかつた。——汽船の笛を聞くと、妹の空想が擴がつた。——彼は、夢心地で床の間の隅の古びたコートを眺めてゐた。

……「君の、そのコートは古いには古いがとても俺——氣に入つてしまつたよ。馬鹿氣でだぶついてゐるんだが、そのだぶつきさ加減に奇妙な調和があるよ。肩の具合だつて斯んなだし、袖だつてそんなに長くつて、どうしたつて君の體に合つてやしないんだが、妙にその合はないところが君に調和して……」

彼の友達で洋服の柄とか仕立とかを氣にするのを命にしてゐる慶應義塾の學生が、羨し氣に彼の肩を叩いて云つた。

「……………」

彼は泥だらけの靴の先を賸めてイヤに含羞^{はにか}んでゐた。

「それは何處で作つたんだい？」

「……………」

「斯う云ふと變に君を煽てるやうだが、尤も君にはさういふ好さは解らないから困るが、俺、此間オブロモフといふ小説を読みかけたんだよ、その小説の初めの方にオブロモフといふ男の着物のことが書いてあるんだ。彼は部屋に居る時、何か薄いガウンのやうなものを着てゐるさうなんだがね、それが非常にだぶついてゐるんだつてさ、それはまアどうでもいゝがその形容の詞^{ことば}が面白かつたんだよ、——オブロモフの着物は、彼がそれを着てゐるんぢやなくつて着物の方が美しい奴隷の如く従順に彼に服従してゐるんだつて……少し俺が面白がり過ぎて翻譯し過ぎたかも知れないが——、その彼の體が五つも入る位ゐな……若しそれが脱ぎ棄てゝあつたならば、誰だつてそれが彼の着物であるとは思へないそれが一度彼の體を包むと……」

友達は、さう云ひかけて彼の肩に腕を載せた。たしか冬だつたらう？ 友達が喋るに伴

れて口から息の煙りが出てゐたから。

彼は、そんなことを云はれると、まったくわけは解らなかつたが、一寸嬉しかつた。オブロモフなんて稱ふ小説は讀んだこともなかつたが、そんなとてつもない代物に比べられたので、自分が偉くなつた氣がしたのだ。そして彼は、それ位ゐ有名な小説を讀んでゐなくては輕蔑されさうな氣がしたので、

「あゝ、オブロモフか。」といかにも輕やかな知つたか振りを示して空とぼけた。

「實にあれは素晴らしい小説だね。近代文學の要素たるアンニユイの凡てを抱括してゐる。そして、全篇一脉の音樂的リズムに依つて渾然と飽和されてるぢやないか。」などゝ友達は圖に乗つて書物の廣告文見たいな言葉を發した。

此奴の頭は少々怪しいぞ——彼は自分が何も知らない癖に、もう相手を馬鹿にした。

「うむ、さうだよ。」と彼は答へた。肯定さへしてゐれば自分のボロも出ないで済む……などゝ至つて狡猾な量見を持つてゐた。

「まア、そんなことはどうでも好いんだが。」と友達は慌てゝ言葉を返した。「實は僕、君のこのコートが欲しくつて堪らないんだ。その通りの型にして新しいのを一着拵へるから、

それと君交換して呉れないか？」

「厭だなア！」と彼は、さもさも残り惜しさに答へた。今が今迄彼は厭々ながらそのコートを着てゐた。他に外套がなかつたので内心恥しい思ひを忍んで斯んなものを着てゐるのだつた。だがこの男にそんなことを云はれると、持前の卑しい虚榮心が出て、——俺はワザと斯んなに亂雑な服装をしてゐるんだ、ボンクラな奴には解るまいが肚では相當身なりにについてもたくらんでゐるんだぞ——といふ、まつたく咄嗟の考へに氣づいたのだつた。オーバーコートを拵へる爲に母から貰つた金を蕩盡して了つたので、よんどころなく冬の真中だといふのに、そんなクレベネット製の裏もない古コートを着用してゐたのだ。實家へ歸つた時、父の古外套でも持ち出すつもりで、そつと物置へ忍び込んでトランクを掻き廻した時、底から探し出したものだつた。

「僕だつて君、多少氣に入つてゐるからこそ斯うして着用に及んでゐるのさ。でなくて誰が酔狂にこの寒さに斯んなものを……」と彼は恬然としてうそぶいた。

「やつぱりさうだつたのかなア！ あゝ、悲觀した。」

友達は、仰山な地團太を踏んだ。——友達に別れると彼は、眉を擧めて舌を鳴した。「斯

んな物、貰ひ手があれば喜んで進呈したら好かつたのに——。」

……………

彼は、寢床の中でそんな回想に耽つた。半ばは夢らしかつた。五、六年も前の追憶だ。——そんなに古い話で、全く忘れてゐたのを、細君の餘計なお世話から、突然この古コートが彼の身邊に現れたのだ。——彼は、此頃午後になると大概海で暮した。往來を通らず、短い松原を脱けると直ぐに海なので、いつでも彼は素ツ裸で出掛けた。それを細君が嫌つて、一週間も前に彼の用事で彼の實家へ遣らせられた時に、

「家ぢや土用干だつたので、長持の底から斯んなものが出て來たの。多分あなたが學生時分に使つたんでせう？ 随分ボロね。でもこれなら面倒がなくて好いでせう。海へ行く時に着て行きなさいよ。」と云つて持つて來た。

「うむ、それは俺のだ。」

彼は、苦笑を懐へて、きつぱりと答へた。以來彼は、細君の言葉に従つて、海へ行く時には必らず裸の上にはおつて行つた。

「とう／＼このコートが、實は女物なんだつて事は誰にも氣が附かれずに濟んで了つた。」

さう思つて彼は、一寸皮肉な微笑を洩したかつた。これは混血兒の妹のレインコートなのだ。彼が、トランクの底からこれを見つけ出した時、娘から父に與へた手紙がポケットの隅にあつた。手紙の内容は、大したものではなくたしかピクニックへ誘つたものだつた。そんなもので父もうっかりして棄て損つたのだらう。——父の寫眞帳に、このコートを着た妹と父があつた。友人の娘だ——など、父が母に説明したことを、彼は覚えてゐた。……彼が着て見ると、和服の丈と殆ど同じだつた。……祕密、祕密……さう思つて彼は怖ろしかつたが、苦し紛れにそつと東京に持ち歸つた。その晩は獨りの部屋で、それを着て鏡に寫したり、にやにや笑つたり、通俗小説みたいな想ひに耽つたり、心から涙ぐましい氣持になつたりした。——それから膝骨の下あたりに見當をつけ、裾を五六寸缺でデキチキと切り落した。翌日服屋へ抱へ込んで、ミシンを懸けさせ、歸りにはもうちやんと着込んで、如何にも自分のものらしい顔付きで、たしかそのまゝ友達を訪問した。三月の末頃だつたか？ 何處も冬仕度でその友達とはストープを圍んで話したが、何んでも相手が眼を圓くして、

「いよう！ 馬鹿に氣が早いね、スプリングコートはしやれてるね。」と云つたから、多分

早春の宵だつたらう。——まだ世間一般にさういふレインコートが流行しない頃だつたし、加^かけに色合がそれらしくないので誰もこれが雨外套とは氣づかなかつた。

二

食膳を縁側へ持ち出させて、彼は晩酌をやつてゐた。晩酌なんていふ柄ではなかつたが、此方へ移つてからは毎晩細君ばかりを相手にして、ひどい時には夜中の二時三時頃まで出たらめを喋舌つた。喋舌り疲れて、泥酔しないうちは寝なかつた。

「女中だつてあなたの云ふことなんて諾きはしない。」

伴れて來た女中を自分が歸してしまつた癖に、少しでも自分の動く度数の多さを感じる毎に、彼女は不平を滾した。若い女中で、往々彼が必要以外に親切な言葉を掛けるのを悟つて、別な口實で細君が追ひ歸してしまつた。

「妾、あのことを考へると口惜しくつて堪らない！」

細君は、ひとりでビールを飲み始めてゐた。あのことゝ云ふのは彼の親父のことだ。此間彼女が歸つた時、酔ひもしないのに口を極めて父が彼の悪口をさんぐ喋舌つたといふ

のだ。

「あんな女に引ッ懸けられて、お父さんはもう気が少しどうかなくなつて了つたのよ。前とすつかり變つてしまつたぢやありませんか。前には決して道樂なんてしなかつたんですつてね。……」

「うん、さうだよ。」

彼は、さうは思はなかつたが、好いお父さんが女の爲に悪くなつたといふことで、細君を残念がらしてやりたかつた。

「外國に十何年も居る間だつて、それはそれは潔癖だつたんですつてね。始終あなたとお母さんを思ふ手紙ばかり寄越してゐたといふぢやありませんか。」

「まアそんなわけかね……。」

彼は皮肉な氣がしたが一體それは誰に向けるべき皮肉か、ちよつと考へに迷つた。後に小憎らしい父親の顔が髣髴としてきた。

「あなたが『熱海へ』とかといふ小説みたいなのを書いたでせう？」

「お前讀んだのか？」彼は、ギクリとして問ひ返した。

「妾は、とつくに讀んだわ。妾が讀んだのは好いとして、それをお父さんが讀んだんですつて！」

「ヤッ！」と彼は、思はず叫んだ。そしてテレ臭さの餘り誰に云ふともなく、

「馬鹿だなア！」と呟いた。

「それもね、たゞ讀んだのぢやなくつて、杉村さんがその雑誌を持つて來てお父さんの前でペラペラと讀みあげたんですつて……」

『熱海へ』といふのは彼の最も新しい創作だつた。事柄は實際の彼の家庭の空氣をスケッチ風に書いたのだ。尤も彼は、その小説の主人公である自分だけは「私」としてはきまりが悪いもので「彼は——」「彼は——」といふ風に出来るだけ客觀的に書いたが、彼の父や母や細君になると、さうはしなかつた。五十二歳にもなつた父親が遊蕩を始め、妾のあることを母に發見されて悶着が起つたり、そして彼等の長男である即ち「彼が——」その間で自分の兩親を輕蔑しきつてゐる話を書いたのだつた。彼自身、そんなものが家の者の眼に觸れようなどは夢にも思つてゐなかつたのだ。

「あれぢや怒るのも無理はない。」と細君は、呟いたが自分も腹ではあまり好かない彼の父

や母のことを、普段はオクビにも出さない彼が、小説の場合になるとさんぐくにヤツつけてゐるので、一寸好い氣持になつたらしく、自分のやられてゐることも忘れて、苦笑した。彼はどうすることも出来ず怖ろしく六ヶ敷い顔をして切りに盃を重ねてゐたが、やがて斯んなことを喋り出した。

「創作と實生活とを混同するやうな手合は、素晴らしい藝術品であるべき裸體の彫刻を見て淫らな聯想をするのと同じだ。言語道斷な連中だ。さういふ奴等が近親に在ることは不幸の至りだ。第一お前が俺の小説を讀むなんて失敬だ。うす汚い感じがする……。」

無論彼の言葉は、横腹に穴があいてゐて何の力もなかつた。云ふまでもないことだが、彼自らが今自分で細君を非難した文句に當るべき程の男なのだ。これも餘計だが、實際彼は裸體の彫刻を見ると、先づ恥づべき個所に注目するのだつた。

「そんな手前勝手は通りませんよ。自分が云ひ度い放題なことを云つてゐて、創作もないもんだ。それにあゝいふことを書くなんて、まつたく外聞が悪いわ。親の恥を天下に……。」

「黙れツ！」と彼は叱つた。

「何さ、その顔は！ 小説なら小説らしくちやんとしたものを書きなさい。あんなものを書

いてゐるうちは何時までたつたつて有名になんてなりツこない。それが證據にはあなたのものは一遍だつて譽められたことなんてありやしないぢやありませんか。」

「よくそんなことが解るね。」

努めて白々しく呟いたが彼は一寸氣が挫けた。小説家志望なんて一日も早く斷念した方が好きさうな氣がした。それさへ止めれば斯うまで親達に馬鹿にされもせず、何とか済むだらう……なども思つた。

「いくら妾だつて新聞の批評位は、讀みますわよ。」

「新聞の批評なんて駄目だ。」

「だつてあれを書く人は、皆あなたよりは偉い人ばかりでせう。——それにしても妾一遍もあなたの小説が譽められてゐるのを見たことはありませんよ。」

「中戸川吉二と柏村次郎には相當譽められてるよ。」

「お友達ぢや駄目だわ。」

「俺は友達の評が一番好きなんだ。」

「それは負け惜み——。」

「もう小説の話は止さう。」と彼は、靜かに呟いた。その彼の様子が如何にもしをらしかつたので、細君の心はいきなり父の方へ向つた。

「ほんとうに此間は妾、口惜しかつたのよ。」

「もう幾度も聞かされて、よく解つたよ。俺だつて口惜しいと思つてるさ。親父があんな馬鹿な眞似さへしてゐなけりや、俺だつて斯んな處になんて住ひ度くはないんだ。」

さう云ふと同時に彼は、氣恥しくなつて、海の方へ眼を反らした。……友達などには、長篇小説を書く爲に來てゐるんだとか、東京に飽きて小田原に引ッ込んだが、其處も嫌になつたから、思ひ切つて斯んな遠くに移つて見たとか……などと如何にも體裁よく意味ありげな吹聴をしてゐるが、内實と來たら、良人が無能の爲に細君が姑に苦しい思ひをしたり、父の不行蹟の爲に家庭が収まらず、親の争ひを俸が見るに忍びなかつたり、「彼が家に居る間は、斷じて歸らない。顔を見るのも嫌だ。」などと父が彼を罵つたといふことを聞いたり……そんなわけで這々の態で彼は、春以來熱海へ逃げ延びたのだ。彼だけは、一度も小田原へ歸らなかつた。だがいろ／＼な風聞が傳はつた。彼が居なくなつてからは割合に多く父が歸宅するとか、歸れば必ず一度は激しい夫婦争ひをするとか――。

「どつちもどつちで、滑稽な憐むべき人物だ。」

彼は、兩親をそんな風に斷定して、愚かな觀察を享樂するのだつた。本を読むでもなし、また小説なんて書く氣持は毛頭起らなかつた。それにしても此方へ來て以來の退屈さ加減は夥しかつた。温泉に浸つたつて逆上せるばかりだし、風景を見て慰められる質でもなし、散歩は嫌ひだし、また獨り藝術的な思索に耽るなんていふ落つきは生れつき持ち合はせなかつたし、まつたく彼は、日々その身を持ってあますばかりだ。實家に居てあの苦しみに忍ぶことゝ、此方でこの退屈と戦ふことゝ、どつちが苦しいか比べて見れば、あつちの方は相手が人間であるだけ兎も角賑やかで面白かつた位にさへ、思はれるのだつた。

「でも妾は、お母さんと一處に暮すことも御免だわ。」

「そりやア、さうだらう。」と彼は、易々と點頭いた。彼は、細君の場合とは別な意味からでも、いろ／＼母の嫌な性質を、それはもう幼少の頃から祕かに認めてゐた。時々彼は、父が外國へなど行つた原因は母にあるんぢやないか知ら？と思つたり、また變に武士の娘を氣取つて堪らない切り口上で亭主を説伏させやうとしたりする様などを眺めると、彼はゾツゾツと寒けを覺えて「これぢや親父の奴もさぞやりきれねエだらう。」と父に同情する

場合もあつた。

「お父さんがよくお母さんのことを、學校先生なんてしたから變になつちやつたんだとか、先生根生で意固地だとかつて云ふけれど、まったく變に優しいところと、妙に意地悪のところと別々なのね。」

「うむ、さうだ。」

彼が餘り易々と受け容れたので、細君は一寸バツが悪くなつて、

「けど、十年年も留守居をさせられては誰だつて變にもなるわね。小學校なんかに務めて氣を紛らせてゐたのね。」などと呟いた。

「どうだか俺は知らんよ。——だが、つまり生れつきあゝいふ性質なんだらうさ。」と彼は、相當の思想を持つてゐる者のやうな尤もらしい表情をした。

「あなた、妾をどう思ふ。」

突然細君が、さつ訊ねた。彼は、一寸返答に迷つたが、強ひて考へて見ると煩さゝの方が餘計だつたので、

「近頃、やりきれなくなつた。」と明らさまに答へた。

「ぢや、どうするの。お金さへあればお父さんのやうなことを始める？」

彼は、にや／＼して返答しなかつた。一寸親父が美しい氣もした。若し金があつても、彼にはそんな運には出會へさうもない氣がした。

「そりやア妾への厭がらせでせう、ちやんと解つてる。」

「今、俺は少しもふざけてはゐないよ。」と彼は、きつぱり斷つた。

「それは別として、これから家のことを小説に書くだけは止めなさいね。お父さんの怒り方はそれはそれは素晴らしいわよ。今度若しあなたが出會へば、屹度一つ位ゐ……」と彼女は拳固を示して「やられるわよ。」と云つた。

細君にそんなことを、くどく聞かされてゐるうちに彼の心はだん／＼變つてきた。まさかと高を括つてゐた小説を讀まれて、何より辟易してゐた氣持が、皮肉なたちでほぐれ始めた。彼は、父の憤怒の姿を想像して、快感を覺えた。……餘りこの俺を馬鹿にしたり、年甲斐もなく女などの事件で家庭に風波を起させたり……親爺よ、みんなお主が不量見なんだ、俺の小説を讀んで、どうだい、驚いたらう、斯ういふ因果な倅を持つて、さぞ／＼白晝往來を歩くのがきまりが悪いだらうよ、態ア見やがれ——彼は、さう云つてやりたか

つた。——それにしても小説なんていふ手温く下等な手段でなくて、もつと皮肉で痛快な厭がらせをやつてやりたいものだ——と彼は思った。

いつの間にか細君は、獨りでビールを一本平げてしまつて、顔をほてらせてゐた。こんなことは珍らしかつた。彼は、自分で勝手もとから一升壘を持ち出して来て、頻りに酒を飲み續けた。

「妾、ちつとも酔はないわ、何だかもつと飲んで見たいからそれを飲ませて頂戴な。」

彼女は、酔つてゐるかどうかを考へてゐるらしく眼を瞑つて、ちよきんと脊骨を延して坐つた。若し普段なら一撃の許に彼は退けてしまつたが、彼も妙に氣持が浮の空になつて、その上陰氣でならなかつた爲か、少しも細君に逆はなかつた。

一時間の後、彼はぐでんぐでんに酔つぱらつてしまつた。尤も細君の方は、酒の酔なんて経験したこともなかつたから、表面はイヤに固くしやちこ張つてゐた。

「どうだい、何か素晴しく面白いことはないかね。」

彼は、酔つて來るといつでも斯んなことを云つたが、自分も酔つてゐるので細君もそんな氣になつて、初めて、

「さうね。」と徒らな思案をめぐらせた。

「海岸にカフェーが出来たね。あそこに東京者らしいハイカラな女が居るぜ。行つて見やうか。」

「行きませうか。」

「いや、田舎ツペの青年が來て居るだらうから不愉快だな。」

「ぢや、たゞ海へ降りて見ませうか。」

「そんなこと眞平だ。飲む事か、喰ふ事か……何しろ賑やかなことでなければ御免だ。」

「妾、折角夏服を拵へたんだから一遍着て見たいわ、斯んな晩でなければとても實行出来ないからね。」

「あゝ、それは好い。」と彼は氣附いたやうに云つた。そんなものを拵へたのが彼に知れれば、酷く彼が怒るのは解り切つてゐたので今日まで細君は祕してゐたのだ。彼女は斯ういふ機會に、斯う高飛車に云へばその儘、通つてしまふ彼の缺點を知つてゐた。だが、それにしても今日は良人がイヤに機嫌が好いので一寸薄氣味悪くもあつた。

「そしてこれから自働車を呼んで、ホテルへ行かう。」と彼は云つた。森を三つばかり越え

た嶮崖の一端に西洋風のホテルがあつた。斯んな所には珍らしく明るい家だつた。

「でも今月このお金を費つてしまへば、もう貰へないわよ。」

「關ふもんか、今日はひとつウンと贅澤をして、あそこへ泊つてしまはう。金なんて心配するねエ……おふくろがケケケ云へば友達に借りるよ。」と彼は、大變な威勢を示した。

彼は、腕組をして細君の仕度を眺めてゐた。彼女は、怪し氣な足取りで、だが、きつと彼の留守の時に幾度も着てでもみたんだらう、割合に手ツ取り早く着こなした。

「ふん、仲々好く似合ふね。洋装の日本婦人は大概顔の拙い奴が多いが、そしてお前もその仲間だが、體の格好は仲々見あげたよ。」

彼は、白々しくそんなお世辭を振りまいた。——そして、いざ出かける時になつて、

「それぢや寒くはないかね。俺のこのコートを貸してやらうか。」と云つた。

「馬鹿々々しい、そんな汚い、男のコートなんて。」と細君は耳も借さなかつた。……彼はゾツと身ぶるひした。冷汗が流れた。「此奴は餘ツ程どうかしてゐやアがる。まるで芝居でもしてゐる氣だ。馬鹿がく。」と自分を顧みて、彼はもう一步も外へ出るのは嫌になつた。

彼は、酔ひ潰れて疊に轉がつてゐた。……いくらか眠つて、どうも夢を見たらしい……

と彼は口のうちに呟きながら、死んだやうな熟睡に墮ちた。——それぎり細君から洋服の話を聞かないから、或は彼の想像通り夢だつたのかも知れない。

三

彼が中學の頃の友達だつた宮田が、五六日前から滞在してゐた。宮田は泳ぎ好きで、近頃ではもう彼は海へ行くのも飽きてゐたのだが、宮田と一緒に毎日出掛けた。日盛りになると彼の焦けた背中は、鹽煎餅のやうにピリピリと干からびて水に浸さずには居られなくもあつた。

初島へ三里、大島へ十八里と誌した棒杭が立つてゐるが、素晴しく朗らかな天氣で、三里の初島も十八里の大島も何の差別もなく、青白い肌を無頓着に太陽に曝してゐた。赤い蜻蛉が無數に砂の上に群り舞つてゐた。微風もなく、暑さが凝と停滯してゐるばかりなので、蜻蛉の影が砂地にはつきり寫つた。——宮田は沖を悠々と泳いでゐた。彼は、そんなに泳げないので、浮標の近所で、腕を結んで逆さまに浮んだ。水が耳を覆つて何の音も聞えない。空は青く、だがあまり碧く澄み渡つてゐるので、彼は眩暈を感じた。彼は、慌て

た犬泳ぎで陸へ這ひあがり、要心深く砂地に腹を温めた。宮田は、鮮やかな抜手を切つて頻りに泳いでゐた。あの位の泳げたらさぞ愉快だらうが——などと彼は思った。

「もう船が出る時分だね。」

さう云ひながら、あがつて來ると宮田は、彼の傍に寢轉んだ。

「着いてから行つて丁度好いよ。」

一三日うちに全國庭球大會といふ競技があるさうだつた。宮田の兄は小田原クラブの選手で、三時の船で來るさうだつた。

庭球大會の日には、彼も見物に行く約束をしたが、寢坊して行き損つた。午後から行かうとも思つたが、うつかり晝寝をしてしまつて、歸つて來た二人の宮田に起された。宮田の兄は、ぐつたりと疲勞してユニフォームの儘大の字なりに座敷に寢轉んだ。小田原組が優勝してカップを獲た、と自慢した。

いつもの通り彼は、埴詰の酒や罐詰の料理などで酒盛りを始めた。弟の宮田は、酒好きの癖に、兄貴の前では一滴も飲まなかつた。馬鹿な放蕩をして、一年ばかり勘當されて漸く歸參が叶つたばかりだといふ話だつた。道理で弟の宮田の奴イヤにおとなしく兄貴の云

ふことをヘイヘイと諾いてゐるやアがる——と彼は思った。

彼は、それが一寸氣の毒にもなり、白々しくもあつたので、

「ほんとに飲まないのか。」と弟の宮田を見あげて苦笑した。

宮田は、笑つて點頭うなづいた。兄貴が、それ以上氣まり悪さうに、白けた。弟は此方に来る前手紙で、今小田原のK病院に入院してゐるが、未だに實家への歸參が許されないうで閉口してゐる、親父や阿母は何でもないんだが、兄貴の奴がとても頑張つてゐて始末に終へない、親父は君も承知の通りあゝいふ優しい人で、在れども無きが如き存在だが、いんごうなのは兄貴だ。聞くところに依ると近頃では阿母が兄貴の前で涙を滾して、僕の歸參を懇願してゐるさうだ、容易に兄貴がウンと云はないさうだ。僕だつて兄貴を恨みはしない、再三の失策をしてゐるんだから——そんな意味のことを彼に傳へてゐた。だから彼は、その兄貴の前で慎ましくしてゐる弟を見て可笑しくなつた。

だが彼は、宮田の家庭が美しかつた。宮田と彼の家庭と比べれば、その長男の存在が、實に雲泥の差である。彼の家庭では、寧ろ彼の小さい弟の方が權力を認められてゐた。兄の宮田に比べて自分の方がより愚物であるとは思へない——彼は、そんな馬鹿氣たことま

で考へた。

「信ちやんの酒の飲み方は、何時までたつても書生の失戀式だね。」

兄の宮田は、快活な調子で彼にそんな批評を浴せた。彼は、兄の宮田には古くから好意を持つてゐた。宮田の言葉は、凡て技巧的で野卑を衒つたが、それが如何にも朗らかで、クラリオネットで吹き鳴らす唱歌を聞く感じがした。そしてその容貌や體格が彼の氣に入つてゐた。繊細で、快活で、そして鹿の如く明るい涙を胸の底に藏してゐた。弟の宮田が、彼に甘えて兄貴の悪口などを云ふと、彼は極力皮肉まじりの反對を唱へた。お前の方が餘ツ程馬鹿だよ、と云はんばかりに――。

斯ういふ風だから家庭に於てもあれ程の權力があるのか知ら――彼は、そんなに思つて一寸陰鬱になつた。「宮田に比べて、何と俺は愚圖だらう、そして胸の底に憎い心を持つてゐる、澄んでゐない。」

夜釣りの舟が遠い街のやうに庭から見降ろせた。

「良三、あそこにビール箱があつたね、あれを二つばかり持つて來ないか。」と兄の宮田は弟に命じた。

「あゝ。」と素直に弟は、ビール箱を運んだ。それを二つ庭の突鼻に据ゑて涼み臺にした。

「こゝで酒を飲まうや。」

「だが。」と彼は逡巡して「こゝでは往來を見降ろして悪い氣がするから、もう少し後ろにさげようや。」と云つた。弟の宮田は、軒先に電燈を釣るし、それにスタンドをつないで庭を明るくした。

「おいビール位は飲めよ、ねえ兄貴それ位は許してやれよ。」

彼は、もう酔が廻つてそんなに云つた。それでも一寸兄は迷惑さうな顔をしたが、仕方がなささうに點頭いた。弟は、待ち構へてゐたらしく勝手へ走つてビール壘をさげて來た。彼は、誰にでもいゝから一寸これに類する威嚴を示して見たいものだなどと思つた。

「おいおい、コップ位は買つたらどうだい。」

兄の宮田は、直ぐに氣持を取り直して彼をからかつた。コップが一つもないので、コーヒ―茶碗を弟が持つて來たのだ。

「何によらず僕は買物といふことが嫌ひでね。どういふわけか僕は物を買ふといふことが變に氣恥しくつて――。」

彼は、氣分家を衒ふやうに云つた。

「道理で細君が、うちの人はケチでやりきれないと云つて滾してゐたつけ。」

「僕があした海の歸りに買つて来てやらう。」と弟の宮田が云つた。兄貴は横を向いてゐたが突然、

「塚詰はうまくないから、ひとつ俺が酒屋へ行つてどんな酒があるか見て来る。」と云つて出かけた。間もなく、白タカの好いのあるさうだから頼んで来たと言つて歸つて来た。

「こゝに涼み臺を据ゑたのは理由があるんだよ。今晚のうちに選手達は小田原へ自働車で歸るんだつてさ。こゝで見張りをしてゐて、應援してやらうと思つてゐるんだよ。」

「君は何故歸らないんだ。」と彼は訊ねた。

「いや僕はあした汽船で歸るんだよ。あんな酷い崖道を通るんぢやとても怖しくて敵はな^{かな}い。ケイベンにしる自働車にしる、あれぢや間違ひのない方が不思議だ。」

「兄さんは泳ぎが達者だから船なら平氣だらう。」と弟は媚を呈した。

「此間君の親父に往來で出遇つたよ。」

「……」彼は、ゾツとして、だがまさか宮田なんて何も知らないだらうと高を括つて、

「ふん。」と白々しく點頭いた。

「君のことを云つてゐたよ。」

「何と！」

彼は、眼を圓くした。

「いや……」と兄の宮田は、わざと意味あり氣に笑つて「君も、何か失敗したのかね。」

君も——と云つたので弟の方は一寸厭な顔をした。

「いや別に……」

「内容は知らないが、何だか馬鹿に憤慨してゐたよ。信の奴、信の奴、と何遍も云つてゐたぜ。」

「は、アーン！」と彼は、みんな知つてゐるからもう止して呉れといふ色を示した。

「が、脛嚙りぢや何と云はれたつて頭はあがるめえ——」

それはいくらか弟への厭味でもあるらしかつた。斯んな機會に日頃の鬱憤を、大いに洩してやらうか——さうも彼は思つたが、言葉が見つからなかつた。

「だが、君の親父近頃大分若返り振りを示してゐるさうぢやないか。」と兄の宮田は無造作

に笑つた。彼は、息が詰つた。

そんな話をしながらも、兄の宮田は、自動車の音がする毎に立ちあがつて、

「小田原！小田原！」と叫んで見た。三四回無駄な骨折りをしてゐた。

選手の自動車は、騒然たるエールを乗せて崖下の道にさしかゝつた。兄の宮田は躍りあがつて、

「小田原！萬歳！萬歳！」と叫んだ。それに伴れて弟の宮田も同じく聲をそろへた。向方は走る一塊の騒音ばかりで、何の返答もなく直ぐ森の蔭に消えてしまつた。弟の宮田は實はそんな大聲を發したくないのだが、兄貴があまり一生懸命なので傍觀してゐるのは悪くでも思つて試みたらしく、その聲は半分彼の方を意識にいれてテレてゐる見たいだつた。

街から歸つて來た細君が、石段をあがつて來て生垣越しに彼の後姿を眺めて、

「薄暗いところに、そんな風に立つてゐると姿が何んにも見えない、背中があんまりくるいもので——何にも無い見たい！」と云つた。

彼は、肌脱ぎで宮田達の後ろにぼんやり立つてゐたのだ。あまり手持ぶさたなので、無数の星が閃いてゐる空を見あげてゐたのだ。

四

兄が歸ると、弟の宮田はホツとして、夕方になると嬉し氣に酒を飲んだ。此間のビール箱が、あの儘庭に残つてゐるので、陽が照らないと晝間でもそれに腰かけて、よく彼はトランプに熱心な宮田の相手をした。

「今晚の御馳走は何です。」

宮田は庭から、座敷で編物をしてゐる彼の細君に聲をかけた。

「また牛肉ぢや厭？」

「牛肉だつて好いから、もう少し料理を施して呉れなけりや……」

「良ちゃん、自分で料理したらいいのに。」

彼は、黙つて手にしたトランプの札を瞞めて居た。スペートのキングの顔を眺めてゐると、妙に父の顔が浮んだ。尤も彼の父は、鬚もないし、顔だちだつてあんなではなかつたが——彼がうつかりしてゐるうちに、宮田がスペートのジャックを棄てたので、彼はキングを降ろしマイナス十五點をしよはされた。

「親爺ぢや参つたらう。」と宮田は鼻を蠢めかせて笑つた。スペートのキングを彼等はいつでも親爺と稱してゐた。

「手紙！」と細君が、不興な顔つきで云つた。直ぐに彼は、母からだど悟つた。——凡そ彼は、近親の手紙を喜ばなかつた。殊に母のは閉口した。その内容の如何に關はらず、いつの時でも變な恐怖と救はれ難い憂鬱とを交々感ずるのが常だつた。東京の生活を切りあげてから暫く兩親のそばに住んでゐたので、この厭な氣持に久しく出遇はなかつたが、四月以來また離れて暮すやうになつてからは、少くとも一ト月に一回は母からの音信に接しなければならなかつた。

彼は、いつもの通り云ひ難い冷汗を忍んで慌て、讀み下した。(その日は彼がスペシャルな要求をしたのに對する、スペシャルな返事だつた。)

「拜啓 先日の敬さんからのお言傳は聞き及び候 皆々至極壯健の由安堵いたし候 猶この上とも十分に注意せられ度候 さて御申越の金子は本日は最早時間なければ明朝出させ申すべく或は石川に持たせつかはすべく候

父上は滅多に御歸館なく稀に歸れば暴言の極にて如何とも術なく沁々と閉口仕り候

今や私もあきれはて候故萬事を放擲してこの身の始末致す覺悟に御座候 父上の憤りは主に御身に向けられる憤りの如くに考へられ候

御身のことを申すと父上は形相を變へ一文たりとも餘計なものを與へなば承知せぬぞといきまき居り候

さて私も兼々の計畫通り今回一生の思ひ出に富士登山を試むべく明十二日午前八時當地出發の豫定に御座候 伴れは松崎氏 寛一 榮二 瀧子 冬子等同行六人に候 私も承知の體故いかゞとは存じ候へども運を天に任せ決行の次第にて、若しもの時は後事よろしくお頼み申し候 尙私所有の遺物は大部分榮二へ御譲り下され度願上候

父上は當分歸宅なき様子にて決して依頼心を起すことなく御身も自活の道を講ぜられ度願上候 若し無事歸宅せば私も御身の滯在中その地へ参り種々心残りのこと傳へ置きたく思ひ居り候

八月十日夜認む

母より

信 一 殿 御許へ

讀み終ると彼は、慌て、座敷へ駆けあがり手紙は机の抽出に投げ込み、何か用あり氣に

一寸玄關へ走り、見るからにワザとらしい何気なさを装つて宮田の前に坐つた。すつと勝ち續けてゐた勝負だつたが、それから三番も手合せしても彼は負け續けた。いかにもありさうな、そして安ッぽくシンボリカルな小説の結末のやうで、彼は可笑しかつた。——そして身邊の多くの事柄を、稍ともすればそんな風に不遜な考へ方をしようとする自分をかへりみて、身の縮まる思ひをした。

五

九月一日には、またと無い大地震が起つた。幸ひ家は潰れなかつたので、家のなかで彼は當分蒼くなつて震へてゐた。

小田原では母の家だけが辛うじて残り、他は凡て焼けてしまつた。

貸家とか土地とかで生活してゐた彼の父は、無一物になつて、彼が初めて歸つて見ると、蟬の脱け殻のやうな顔つきでぼんやりしてゐた。

父は、妾の家族を抱へ込んで途方に暮れ、焼けあとに掘立小屋を持へる手傳ひをしてゐた。母だけは、自分の所有になつてゐる家が残つたので、父の方などには一文も金を遣ら

ないと云つて、獨りで住んでゐた。

父は、女にやる金がなくて弱つたもので、思案の揚句その掘立小屋で居酒屋を初めさせた。

或晩、彼がその小屋を訪れると今迄とは打つて變つた態度で父は彼を迎へた。そして久しぶりに二人で酒を飲んだ。

「今にこゝに大きなホテルを建てるよ。そしたらお前はその支配人にならないか。」

そんなことを父は話して、彼を苦笑させた。何とかひとつ皮肉を云つてやり度い氣がしたが、遂々出なかつた。

その後彼は東京に来て、或る新聞社の社會部記者となつて華々しい活動を始めた。間もなく彼は、その非凡な手腕を同僚に認められて、社から大いに重要視された。彼は、生れて初めて感じを得々たる氣持で、燕の如く身輕に立ちはたらいだ。

初冬らしい麗かな日だつた。彼は口笛を吹きながら、ステーションへ急いだ。二ヶ月振り小田原へ歸るのだつた。……どんな風に誇張して、得々たる自分の功蹟を説明してやらうか、何と親父の奴が舌を捲いて仰天することだらう！ それにしても今迄いろ／＼な

ことで癩に觸つてゐるから、どんなかたちで、どんな皮肉を浴せてやらうか？ 阿母もひとつ何とか苛めてやらう、この俺を信用もしないで、細君にまで辛く當つたりしたから、此方もひとつ遠廻しの厭がらせを試みてやらう。……彼は、そんな妄想に耽つて胸をワクワクと躍らせた。

彼は、片手に例の「スプリングコート」を抱へてゐた。いくらか冷々したが、それを着て往來を歩く氣にはなれなかつた。

これは、つい此間熱海から届いた行李の中に入つてゐたのだ。

歸りがけに、この古コートを父の掘立小屋に何氣なく置き忘れて來てやらう——彼は、さういふ量見だつた。

彼は、鼻頭をあかくしてセツセツとステーションを眼指して歩いて行つた。

(十二年十二月)

父を賣る子

彼は、自分の父親を取り入れた短篇小説を續けて二つ書いた。

或る事情で、或日彼は父と口論した。その口論の餘勢と餘憤とで、彼はそれ迄思ひ感うてゐたところの父を取り入れた第一の短篇を書いたのだ。その小説が偶然、父の眼に觸れた。父親は憤怒のあまり、

「もう一生彼奴とは口を利かない。——俺が死ぬ時は、病院で他人の看護で死ぬ」と顔を赤くして怒鳴つたさうだ。だから彼は、それを聞いて以來、往來で父の姿を見かけると慌て、踵を回らせた。彼等はひとつの小さな町に住みながら、父と母と彼と夫々別々の家に住んでゐた。

それ故彼は、もう父親には破れかぶれになつてゐたから第二の短篇は易々と書いてのけた。その上、今も彼が二ヶ月ばかり前から書きかけてゐるのは、またも父親を取り入れたものだつた。それが若し滞りなく出来あがつたら、彼はそれに「父を賣る子」と稱ふ題名を付ける氣である。——次の話は彼が未だその第一の短篇を書かなかつた頃のことである。

—

その晩も彼と父とは、酒を酌み交しながら呑氣な雑談に耽つてゐた。晩春の宵で、靜かな波の響きが、一寸話が止絶とぎやれると微かに聞えた。——父の妾の家の二階だつた。

「貴様の子供はいつ生れるんだ？」

忘れツぽさを銜つて、父は彼にそんなことを訊ねた。二人とも、もっイイ加減酔つて、口角をそろへて親類の悪口を云ひ合つてゐたが一寸止絶れたところだつた。

「六月ださうだ。」と彼も父の態度を模倣してわざと空々しく呟いた。

「いよいよ親父になるのか、貴様が！」

父はさう云ふと、傍の女を顧みて仰山に哄笑した。

「そして——」と彼は云つた。この阿父さんは——と云ふのは具合が悪かつたので、眼だけで父を指摘して、

「いよいよお祖父ぢいさんになるんだよ。」と云つた。

「ばかア——。」

でれでれした太い聲でさう云つた父は、云ひ終つてもあんぐりと口を開けた儘、笑ひ顔で彼と女とを等分に眺めた。

「貴様は幾つだ？」

「二十七だ。」

「未だ二十七か。」

「阿父さんは空つとぼけるから厭になつちまふ。」

「だが、二十七は……一寸早えな！」

「僕も内心大いに參つてゐる。」彼はさう云つて、安ッぽく首を縮めてにやにやと如何にも愚かし氣な苦笑を浮べた。

「尤も貴様が生れた時は俺は、何でも二十……」

「えゝ、と？」

彼は眼をつむつて額を天井に向けた。五十一から二十七を引くと幾つ残るか？ を考へたのだが、容易にその答へが見出せなかつた。

「二十——二三だらうよ。」

「随分早えな！ ハッハッハ。」

彼は、今更の如く軽い心易さを覺えて、音聲だけ景氣好く笑つた。——尤も斯ういふ調

子にならなければ、この家の變に亂れた空氣と調和しないので彼は殊更に甘い粗暴を振舞つてゐるのだつた。親爺はともかく倅の態度が、それにしても過ぎたることを思ふと、これは決して他人には見せられない光景だ——と彼は思ふのだつた。初めのうちは彼達の對談をはたの女達も不思議さうに眺めたが、今では逆に慣々しくなつてゐた。おそらく彼の母は、他所で彼等が斯んな振舞ひをしてゐるとは想ひも及ばなかつたに違ひない。

「この頃俺は毎晩毎晩酒にばかり酔つてゐて自分の仕事は何もしない。これぢやどうもいけない。皆なは俺が東京に居るうちとはとても仕様のない暮しばかりしてゐたやうに思つてゐるが、この頃みたいに斯んなにだらしがなくはなかつた。第一酒などをそんなに飲まなかつた——。」

ふと彼はそんなことを口走つた。少々怪しくなつて來たぞ——彼は自分をさう思つた。

「皆な親爺が悪いから、といふわけかね。止せよう。」

「阿父さんも仲々厭味を云ふことが上手になつた。」

頭の鈍い父と息子は、こゝでさもさも可笑しさうにゲラゲラと笑つた。

「だつて——」と父は笑ひが止まると、一寸白々し氣に云つた。「貴様は今仕事がないん

ぢやないか。夏あたりから例の會社に出る筈なんだから、まアもう暫く遊べ〜。」
 「あゝ、さうだね。」と彼は軽く點頭うなづいた。彼が心では、どんなことに没頭してゐるのか？
 まして文學に思ひを馳せてゐるなんてことは父は少しも知らなかつた。——下らねえ月給
 取りなんて止せ止せ、それよりも近く俺が材木會社を初める筈だから、そこに勤める——
 常々父はさう云つて、そんなことでは勵まされない彼を勵ました。いろいろ奔走もしてゐ
 るらしかつたが、彼は父の仕事は解りもせず、寧ろ信用してゐなかつたので、上の空で聞
 き流すだけだつた。

「今日は珍らしくお客がないね。」と彼は女に訊ねた。會社に關係する人々が大概この家に
 出入してゐた。さういふ相談をするには、どうしても斯ういふ家を持つてゐないと都合が
 悪い——父は彼の母によくそんなことを話して、嫉妬深い母親の心を却つて苛立てて、閉
 口することが多かつた。

「いゝえ、もうさつきまで三人いらしたんですよ。」と云つて女は含み笑ひをもらした。「若
 旦那がいらつしやるといふことを聞いて皆さんお歸りになつちやつたんです。」
 「若旦那、男前をあげたぞ。」

父はさう云つて彼をからかつた。五六日前彼は、母と細君に煽動されて、酒の勢ひで來
 客中のこの家に怒鳴り込んだのだ。

「此間はね。」と彼はテレ臭さうに、女に辯解した。「ありやア大芝居なんだ。……だつて阿
 母と周子の奴が煩くてやり切れなかつたんだもの……。」

「お前えの女房もおつに氣取つてやがるね。俺嫌ひだア！」

父は、彼の母のことを既にのけ者にして云つた。

「俺も嫌ひになつたア。」と彼も云つた。「鼻が低くて、眼がまがつてゐる！」

「口が達者で、お上品振りだ。」

そこに二人坐つてゐる若い藝妓達が、口をそろへて「ほんとに此間は、随分妾達も怖か
 つたわ。」——「若旦那は、お口は拙いけれどどこかお強いところがあるわね。」

彼女達が輕蔑してさう云つたのも知らず彼は、これは俺の威嚴を認めたとに違ひない——
 と早合點して、一寸好い氣持になつて、

「ハッハッハ。」と鷹揚な作り聲で笑つた。そして瘦軀を延し、胸を擴げて、

「おい、お酌をしろ。」と眼をかすめて命令した。そして尙も自分の身柄も打ち忘れて、

太ッ腹の男らしさを装ひ、

「うむ、お前達は仲々別嬪だな。」などとお神樂の役者のやうな見得を切つて點頭いた。

「ひとつ取りもつてやらうか。」彼の父は、彼の馬鹿さ加減に揶られて堪らぬらしく、失笑をおさへて彼を煽てた。「ほんとうだよ、女房なんてにこびりついてゐるのは……。」

「駄目？」と彼は、皮肉なつもりの眼を擧げて、にやりと父の眼を視あげた。さういふ言葉を父に吐かせてやらうと思つてゐたのだ。

「親に意見か！」

父は、ペロリと舌を出して平手でボンと額を叩いた。——彼は、厭な氣がして憤つと横を向いた。すると、眼眦が薄ら甘く熱くなるのを感じた。

「親爺は……親爺は……。」この俺の酔ひ振りがいけないだ、これが失策のもとなんだ——さう氣附けば氣附く程、彼の上づつた酔の愚かな感傷はゼンマイ仕掛けのやうに無神經にとびあがつた。

「親爺は馬鹿だア！」

女は、居たゝまれなさうな格好で凝と膝を視詰めた。

「俺は親爺の眞似はしねえぞう。」と彼は更に口を歪めて叫んだ。だが、さう云ふと同時に心の隅が極めて靜かに——おツと、これは云ひ過ぎた。御免々々、あつばれた口は利けぬ——などと呟きながら、そしてたゞいゝ加減に——まア、いゝさいゝさ——と誰の爲ともなく吻ツとした。

「おい、よせく、解つてるく。」彼の父は手を擧げて彼を制した。

「解つてゐればこそ、か。」彼は自分でもわけの解らぬ獨言を、憎々しく洩した。——父は一寸、心から氣持の悪さうな表情をした。

だが直ぐに氣持を取り直して、話頭を轉じさせるやうに、

「貴様の子、俺の孫には、何といふ名前をつけようかね。」と云つた。彼は、救はれた氣がしたには違ひなかつたが、そんなに想像を樂しむと云つた風な言葉を、嘗て父の口から聞いた試しがなかつたので、揶つたく情けなかつた。で、ぶつきら棒に、
「だつて男か女かも解らないし——。」と手前勝手な不平顔を示した。

「多分男だよ。尤も俺は兩方考へてゐる。」

彼の心は、容易くほぐれた。

「嘘だア！」彼は、女が親しい友達に厭がらせでも云ふやうに、狡猾にへつらつた。
「いゝえ、此間うちからいつもそんなことを云つてゐらつしやるんですよ。」と女が傍から加勢して、一寸彼の父をテレさせた。

「何でも家ぢや長男には英の字をつけなければいけないんだつてさ。」父は、軽く慌てゝ、それでも孫を男と決めて、ごまかさうと試みた。

「阿父さんはしきたりが大嫌ひなんでせう。」

「此頃、少し俺もかつき家になつた。」

「第一阿父さんや僕は、長男だが英ぢやないぜ。」

「英の字をつけないと碌な者にならないんだつてさ。」さう云つて彼の父は、彼の顔を見た——そして二人は思はず噴き出した。

「さう云つて見れば弟の方が僕より質が好ささうだね、學校なども何時も優等で——。」

「さうだなア、ともかく今度は間違ひなく英の字を付けようぜ。」

「さうしようかね。」彼もその方が好ささうな氣がした。「おぢいさんの名前は鉞太郎英福だね。」

「鉞太郎か！」彼の父は久し振りで自分の父親の名前を聞いたといふ風に斯う繰り返したが、直ぐに妙なセ、ラ笑ひを浮べた。

「おぢいさんは、どうだつたの、僕にはとても優しかつたが——。」彼は、そんな出たらめな質問を發した。

「俺とはとてもお派が合はなかつた。」

「ぢや品行方正なんだらう。」

「臆病で、ケチ臭さかつた。」

「その前は作兵衛英清だね。」

「うむ、さうだ。」

「作兵衛英清を、阿父さんは知つてるの？」

「知らない。」

「作兵衛英清は少しは偉かつたんぢやないの？」

「どうだか……」話が少し抽象的になつてくると、源は自分にあるくせに彼の父は直ぐに退屈な顔をした。彼の母が、よく意味あり氣な夢の話などをすると返事もしなかつた。そ

の點彼はいくらか母に近かつた。

「だつて僕の幼い時分は、正月などにはきつとおぢいさんが、僕達を作兵衛英清の懸物の前に坐らせてお辭儀をさせたぜ。」

「チョツ、下らねえ。」

「英清の前は——。」

「よくお前えはそんなことを知つてるな。」

彼は得意氣に、

「定左衛門英經。」と云つた。

「ふん——。どうでもいゝや。作兵衛英清は何でも下ツ端の劍術使ひだよ。」

「それぢや英の字もあんまり當にならない——となるかね。」彼は、父があまり好い氣な冷笑をして獨り好がり過ぎる氣がしたので、その初めの提言をからかつてやつた。

「まア、いゝさ。そんな夢みたいな話は止さうぜ。」父の酔は、がつくりと一段高まつた。

「そこへ行くと俺は偉いぞう。」

「そこへ行くと——とは怪しい言葉だ。」彼も次第に酔ひが増して、しみつたれの酔つばら

ひらしく言葉尻にからまつた。

「いや俺は日本人たア量見が違ふんだ。頭が世界的なんだ。それを……だ。貴様の阿母の兄貴なんて、第一俺を馬鹿にしてゐる。俺はお稻荷様見たいな位ゐは無いよ、だが大禮服の金ピカや勳章が何でえ、△△サーヴァントぢやないか、えゝおい……だからだ……」

「僕はまた、さういふ世界的は滑稽に思ふよ。金ピカだつて奇麗だから、無いよりはいいと思ふね、月給取を輕蔑したり、何とかサーヴァントだとか何とか、何だつていゝぢやないか……と、そんなことは云ふものゝ僕は何も保守的な若者のつもりぢやありませんぜ。」

「俺ア、肚は社會主義だア。」

「どうも阿父さんの肚は小さいやうだ。」

「いや、貴様よりは大きい。」

「比較して僕は云つたんぢやない、批評したのさ。」

「あゝもう俺は解らんく——だからだね、いや、だから何もないが、さういふわけです、俺は家のつながりは皆な蟲が好かない。俺が死んだつて泣く奴なんてあるまいよ。たゞ、だね、貴様も馬鹿でさ、俺よりまた馬鹿だから、俺が死んで困るのは貴様だけだぞ。」

「いくら酔つたつてそんな下手なことを云はれちや閉口だ。氣が遠くなる。」

「それが馬鹿だ、といふんだ。」

「あゝ、氣分が少し暗くなつた。」

「氣分とは何だい。昔様の頭は提燈か？」

「うん、提燈だ。」

「提燈とけ驚いた。不景氣な奴だな！ サーチライトにしろ。」

「さうはいかない、生れつきだもの。」

さう決め込んでしまふのも因循すぎるか？ 彼は斯んな冗談にふとこだはつて見ると、生れつきなんていふ言葉を用ひたことが、そして若しほんとにそんな氣を持つたら大變だ——と思つた。

「ところで、もう一遍子供の名前だがね。」と彼の父は、傍のつまらなささうな女に酌をさ
れながら酔つた體をゆり起した。

「俺の名前の雄をとつて英雄ヒテラとしようか？ 男だつたら。」

「英雄ヒテラと稱ふ普通名詞があるんで弱る。」

「ぢや、お前の一イチを取つて英一とするか？ だがそれぢや弟の英二郎と音オトがつくからな？」

「雄オスを取るのと一イチを取るのと、どつちが縁起が好いだらう？」

「さて、さうなると？」さう云つて彼の父は餘程の問題を考へるやうに首をかしげた。彼も何か漠然と考へた。酔つた頭が、風船のやうにふはふはと揺いでゐるのを微かに感じた。

「それはさうと、今晚はどう？ 歸る？」彼は、いつもの通りこの夜も母の手前を慮つて父親を伴れ歸す目的で此處に來たことを思ひ出した。

父は、居眠りをしてゐた。彼は、父が孫の名前を案じてゐるのかと思つてゐたが、父は慌てゝ眼を開くと、

「どつちが好いだらうな？ だが、まアそのことは考へて置かうよ。」と云いた。

「いや、もうそのことぢやないんだよ。——今晚家に歸るか、歸らないかといふこと。」

「今晚は遊んでしまはうや、いゝよ、氣になんてしないで！」彼の態度が生溫いのを悟つて、父はさう云つた。

「さうしようかしら。」

「さうく、家に歸るのは閉口だ。」

「俺も一寸今日は……」

その時父の傍の女が、何か用あり氣に席を離れて階下へ降りて行つたのに彼は氣附くと、その後ろ姿を見送つてから、

「あんな女何處が好いんだらう。」と云つた。

「あれは少々拔作だ。加^{おま}けに面も随分振つてゐるね。」父は大きな聲で笑つた。斯う云ふものゝ云ひ方も、斯うあくどく繰り返しては愛嬌にもならない、厭味だ——と彼は思つて、自分にもさういふ癖があつていつか友達から大いに非難されたことのあるのを思ひ出した。

「阿母は偽善者だ。」

「阿母さんは、阿父さんのことを口先ばかりの強がりで、心は針目度のやうだと云つてゐたよ。」

「これから出掛けて、飲まう。」

「うむ、出掛けよう。」と彼も變に力を込めて云ひ放つた。だが父が先に立つて此方を甘やかすのに乗すると、後になつて蔭で面白がつて彼の行爲を吹聴することがあるので、彼はそれを一寸憂慮した。

「だが、今日のことは阿母さんには黙つてゐてお呉れ。」彼は低い聲で頼んだ。
「誰が喋るものか、馬鹿野郎！」父は怒鳴つてふらふらと立ちあがつた。

二

庭の奥の竹藪で、時折眼白が痛高く囀つてゐた。周子は縁側の日向で、十日ばかり前からやつと歩き始めた子供の守をしてゐた。梅の花びらが散りこぼれてくると、子供はいかにも不思議さうに凝^{ぢぢ}と立ち止まつて眼を視張つてゐた。周子はその態^{まゝ}をしげしげと打ち眺めて、「この子は吃度惻口な子供に違ひない。」と呟いた。そして思はず苦笑を洩した。何故なら彼女はさう思つた時すぐに——少くともこの子の父や祖父よりは——といふ比較が浮んだからだつた。

彼女の夫は次の間の四疊半に引き籠つて、机の前で何やらごそごそと書物の音をたてたり、何か小聲でぶつぶつと呟いたりしてゐた。彼はもう四五日前から、子供とも細君ともろくろく口を利かず自分の部屋にばかりもぐつてゐた。彼女は、彼が何をしてゐるのか無頓着だつた。この頃はあまり夜おそく歸ることもなく、酒に酔ひもしないので、清々とい

い位にしか思つてゐなかつた。

暫くすると四疊半で、

「えゝッ、くそッ！」と彼が何か疝癢を起したらしく、どんと机を叩くや、びりびりと紙を引き裂くのが聞えた。そして彼は、

「とても駄目だ。」と獨り言ちながら、唐紙を開けてひよろ／＼と縁側へ出て來た。

「どうなすつたの？ 顔色が悪いわ。」彼があまり浮かぬ顔をしてゐるので、周子はお世辭を云つた。

「顔色が悪い？ さういふ不安を與へるのは止して呉れ。さういふことを聞くと俺は何よりも悄氣てしまふ。」彼は軽く見得を切つてイヤに重々しく呟いた。周子は笑ひ出したかつたが、彼の様子が案外眞面目らしいので努めて遠慮した。

「悪いと云つたつて種々あるわよ。變に顔色がまつ赤なのよ。」

「英雄のやうか。」彼は氣拙さうに笑つて、子供を抱きあげた。

「何か書いていらつしやるの？」

彼はうなづいただけで、横を向いた。その意味あり氣な様子が、周子はまた可笑しかつ

た。それにしても此間うちから厭に不機嫌で、莫迦々々しい我儘を振舞つては、机にばかり囁りついてゐるが、一體斯んな男が何んなことを考へたり、何んなことを書いたりするんだらう……さう思ふと彼女は、どうせ碌なことではあるまいといふ氣がすればする程、間の抜けた彼の顔に好奇心を持つた。すると彼女は、一寸彼を嘲弄して見たい惡戯心が起つて、「創作なの？」と訊いた。

周子はおそろしく厭な顔をするだらうとは豫期してゐたにも係はらず、彼は、おとなしく、そして心細氣にうなづいた。

「小説——と云つてしまふのは、おそろく狡猾で、下品なまねだらうが……。」彼は聞手に頓着なく、あかくなつて獨りごとを始めた。「俺は此間うちからいろいろ自分の家のことを考へてゐたんだ。親父のこと、阿母のこと、自分のこと、そして英雄のこと……。」

「あなたでも英雄のことなんか考へることがあるの？」

「黙れ！ 考へると云つたつて……。」と彼は險しく細君を退けたが、今自分が云つたやうに重々しくは、家のことだつて親父のことだつて阿母のことだつて……そんなに考へてゐるわけでもない——といふ氣がしたが、

「主に親父のこと……」と付け足した。「そして到頭やりきれなくなつた。」
「何が？」

「貴様とは考へることの立場が別なんだから餘計なことを訊くな——今、清々としてゐるところなんだ、やりきれなくて止めたので——。」

「……。」周子は、ぼかんとしてゐた。

彼は、さう云つたものゝ、淺猿あさびなしい自分の思索を觀て、醜みにくさに堪へられなかつた。たとへ周子の前にしろ、うつかり斯んな口を利いて、己が心の邪よこしままな片鱗を見透されはしなかつたらうか、などゝいふ氣がして更に邪よこしままな自己嫌惡に陥つた。……あゝ、自家のことなんて書かうとする不量見は止さう……彼は、さう心に誓つた。今迄彼は、稀に小説を書いたが、それは主に幻想的なお伽噺とか、抒情的な戀愛の思ひ出とかばかりだつた。だが此頃それには熱情が持てなくなつた。

それならば止めたらよからう——彼は、斯う「新しい熱情」を斥けた。

「ちよつと家へ行つて來ようかな。」

「どつちの家？」周子は立所に聞き返した。彼が出掛ける時には、周子は必ずさういふ問

ひを發するのだつた。そして若し彼が、親父の方だ——と云はうものなら、彼女はさながら夫の惡友を想像するやうに顔を擧めるのだつた。尤も彼が、出掛けるといふ時の目當は、大概父親の方だつた。

「阿母さんに一寸用があるんだ。」

「嘘、嘘。」と周子は笑つた。この邪推深さは酷く彼の氣に喰はなかつたが、事實はうまく云ひあてられたので、

「嘘とは何だ。」とあべこべに如何にも無禮を詰るやうに叱つた。いや、阿母のところにも一寸寄るかも知れない——などと自分に辯明しながら。

「今日これから、あたしお雛様の支度をするんですが、手傳つて呉れない？」

「あゝお節句だね、もう。」

彼は、嘘を塗抹した引け目を感じてゐたところなので、周子から見ると案外朗らかな返事を發した。「男の子なんだから、お雛様なんてをかしいぢやないか。」

「あたしよく。」

「ふざけるない。子供がることはみつともねえぞ。」

「あなたに買つて貰ひはしないから餘計なお世話よ。」

斯んな無神経な手合にかゝつては此方がやり切れない——彼は自分の鈍感も忘れて、愚かな力を忍ばせた。斯ういふきつかけで喧嘩をすることは、もう彼はあきてゐた。その代り肚で一層輕蔑するぞ——と決めた。これがまた彼の狡さで、ほんとは彼女の言葉を最初にきいた時は、雛節句の宵の女々しい華やかさに一寸憧れたのだつた。

「ぢや御馳走を拵へるのか？」

「お客様も二人ある筈よ。だけど肝心のお雛様がとても貧弱であたしがつかりしてるの。」

「お雛様なんて紙ので澤山だ。——それぢや阿父さんと僕もお客様に招まばれようか。」

「お父さんは眞平——。白状すると、怒つちや厭ですよ……、あなたもその晩は居ない方が好いんだが……。」

「ハッハッハ……そんなことぢや俺は怒りはしないよ。その代り俺、あさつては晝間から阿父さんのところへ行くぞ。」

英雄ヒデオはいつの間にか彼女の膝に眠つてゐた。

「ちよつと行つて来るよ。」

「また始まつた。」

彼は、何か口實を設けて出掛けようと考へた。

「あゝ今日は珍らしく氣持がさつぱりとした。」彼は、そんなことを云つて蒼い空を見あげた。「テニスに行かうかな。」

「テニスなら行つてらつしやいよ。」

「ぢや行つて来るよ。」

彼は、しめたと思つて立ちあがつた。

「シャツがもう乾いてゐますよ。」

「今日は、ラケットの袋の中にパンツもシャツも容れて持つて行く。」

「怪しい〜。」と周子は云つた。コートに着物を着換へる場所がないので、いつも彼は家から外套の下に仕度をして行くのだつた。——彼は、思はず度ど膽どを抜かれて、

「そんなら着て行かうよ。」とふくれて云つた。海岸の××といふ料理屋に東京のお客様と一處に来てゐるんだが、其の人にお前を紹介したいから——といふ意味の使ひを父から彼はうけてゐたのだ。彼は、十日ばかり前父と一處の席で出會つた若いトン子と稱いふ藝者が好

きになつて、またトン子に會へると思つて内心大いに喜んでゐたのだつた。そして斯ういふ機會の來るのを待つてゐたのだ。

彼は、破れかぶれな氣で、細君からパンツとシャツを受け取ると、情けなく、手早くそれを身に纏うた。

「ジャケツ？ それとも外套？」

「和服の外套にしようかしら。」

細君は笑つて相手にしなかつた。彼は本氣で云つたのだ。

彼は、頭がぼつとした。ズツクの靴を穿いて庭に飛び降りると、物置から自転車を引き出した。そして往來に出ると、ヒラリとそれに飛び乗つて眞ッ直ぐな道を煙りのやうに素早く走つた。この儘、海岸の料理屋へ行くことを思ひきつたのである。

三

最近彼は、また書きかけた小説「父を賣る子」を書き始めた。一度不仲になつた父との關係が偶然の機會で、もとに戻つた。現在の感情だけに支配されてゐる此頃の彼は、もう

「父を賣る子」を書きつゞける元氣がなくなつた。此間彼が出京する時の彼と父とは、この小説の第一節と殆ど同じ場面を演じて別れたのだ。「父を賣る子」が書きつゞけられないので、出京後彼は、題は考へずにこの小説を書き始めたのである。三つの家のことを夫々書かうと思つたのだつた。そしてこれはもつと長くなるのだ。

この小説の第二節の半ばまで、漫然と書いて、これからもつと鋭く父の事を書かうとして、彼はペンを置いた。三月初旬の月の好い晩だつた。——前の晩友達と飲み過して、氣持も落着かなかつた。

彼は、その晩父の訃報に接した。

脳溢血で、五十三歳の父は突然死んだ。

「父を賣る子」は勿論、この生温い小説すら彼には續ける力が消えた。

「父のことは、もう書けさうもない。」彼はさう思つた。「張り合ひがない。」

「此頃君は事務怠慢か？ さつぱり訪問に出かけないね。」
最近雑誌をやり始めた彼に、友達が云つた。

「何となく氣おくれがするんだ。」

「はッはッは、道理で此頃は酔ッばらつても唱歌を歌はないと思つた。」

「うむ、さう云へばさうだ。」

「獨り靜かに酔ひ給へ、夜。それが一番君がフアーザアの冥福を祈ることになる。」

親切な友達は彼にさう云つて呉れた。彼は、慌てゝ手を振つた。「いや、御免だく。も

う二三日経てば屹度元氣を出すよ。他愛もないんだ。俺なんて——。」

「父親小説は、もうお終ひか？」

「うむ、お終ひだ。」

彼は、尤もらしく顔を擧めて、うなつた。

それで彼は、この題の考へてない小説に、「父を賣る子」を奪つてつけることにした。

もう直ぐに父の四十九日の忌日が来る。彼は、またあの厭な親族達に會ふことを思ふと辟易したが、此度は急に一家の主人公になつたのだから、ひとつ大いに威嚴を示してやらうなどゝ思ひ、その日に云ふべき言葉の腹案と態度のことを今から夢想してゐる。

(十三年四月)

渚

「まあ随分暫らくでしたね。それで何日此方へ歸つたの？」

河村の小母さんは、何の挨拶もなく庭口からのつそりと現れた純吉を見つけて、持前の機嫌の好さで叱るやうに訊ねた。

「四五日前……。」

純吉はわけもなくにやにやしながらうつかりそんな嘘を吐いた。

「だつて學校は餘程前からお休みだつたんでせう？」

「え、そりやアもう七月の初めから休みだつたんですが、一度此方へ歸つて来て——。」

何かうまい口實は見つからないものかと彼が思ひ惑うてゐるうちに、好いあんばいにせつかちな小母さんはそんな話題にこだはつてはゐず、

「ともかく此方へおあがりよ。今日はもう朝から忙しくて、やつと今片づけたところなんです。」といひながら、座敷の障子を明け擴げた。

純吉は縁側に腰を降した儘、煙草を喫しながらぼんやり廣い庭を眺めてゐた。深く繁つ

た泉水のまはりの樹々のなかうらは無数の蟬の鳴聲がひとつに溶け合つて、喧ましい夢のやうに周圍の靜かな空氣をふるはせてゐた。

「旅行にでも出掛けるんですか？」

「旅行？ そんな楽しみぢやないんですがね——。」といった小母さんは楽しみらしく、聲色に意味あり氣な甘味を含ませた。

拙いことをうつかり訊いちやつた！ と純吉は後悔した。……みつ子だな——純吉は直ぐにさういふ想像を擴げた。

「清一が明日名古屋へ行くんで——。」

「あゝ名古屋ですか。」純吉は口ばやく繰り返して、努めて邪念なさ氣に點頭いた。名古屋といふのは勿論みつ子の代名詞なのだ。

さて斯うなると何かみつ子に關するお世辭をいはなければなるまい——純吉はそんなことを思つて、それが非常に厄介な氣がした。

「みつちゃん別に變りはない？」

「え、變りはないが相變らず我儘でね……。」

「ハッハッハ。」純吉はいかにもこの家庭に特別の親し味を持つてゐる者のやうな素振で、小母さんに調子を合せた。我儘でね……も何もあつたものぢやない、この子煩惱の愚かな母親奴！ 純吉は肚でそんなことを思つた。

「斯んなに此方から行く時は食べ物ばかりを持つて行く……。」

小母さんは笑つて、座敷の隅の品物を指差した。

「子供は？」

「いゝあんばいに大變丈夫ださうです。」

「みつちやんが、阿母さんになつたかと思ふと何だか可笑しいなア。」

「そんなことをいつたつて純ちやんだつて、今にすぐお父さんですよ。それはさうと學校は何時卒業？」

「未だ、未だ。」純吉は何の興味もなく呟いた。まつたく彼は、そんなことは大變茫漠とした謎のやうな氣がして、そんなカラお世辭をいはれると煙のやうな頼り無さを覺ゆるばかりだつた。彼は、苦い顔をして泉水の水を眺めてゐた。——今迄は古いなじみの爲か何の氣にも懸らなかつたが、みつ子が居なくなつてからは、親類でも何でもないみつ子の母親

のことを今迄通り小母さん／＼なんて稱ぶのも妙な氣おくれを覺えた、さう思ふと此家に來ることも酷く面倒で、加^{おま}げに小母さんと斯んな會話を取り交すのは何よりも退屈な氣がしてならなかつた。

「やア失敬、暫く。」

湯あがりらしく艶の好い顔を光らせて、清一が出て來た。

「やア、暫く。」純吉は努めて愛想よく微笑んだ。此奴拙いところに來やがつた——清一が自分のことを一寸さう思ひはしなからうか？ 純吉はそんな邪推を廻らせた。

「姉さんが此間手紙で、君によろしくといつて寄越した。」

「あゝ、さう。僕からもよろしくいつて呉れたまへ。」さう答へて純吉は、よろしくとは一體何たることだらう、馬鹿氣たやりとりだ、などゝ思つた。それにしても清一の口から自分の消息を聞いて、彼奴まだ相變らず口先ばかり元氣なことを喋つてぶら／＼まごついてゐるのか！ みつ子がそんなに思ひはしないだらうか、などゝ純吉は想像して冷汗を掻いた。

「純ちやんは此頃家に遊びに來るかなんて訊いて寄越した。——だが此頃少しも遊びに來ないんだね、學校の方が忙しいの？」

「あゝ、學校はあまり忙しくもないがね、滅多に此方へ歸らないんだよ……。」
さういつて純吉は思はせ振りに、卑しい笑ひを浮べた。

「面白いだらうね、東京の學校は？」人の好い清一は、學校へも行かず家の業を繼いだ自分の身を啣つやうに寂しく訊ねた。

「なにしろ彼方に居ると友達が多いからね。」純吉は、そんな出たら目を喋つた。彼は東京には一人の友達もなかつた。碌々學校へも通はず、多く下宿の二階に轉々して暮しながら休暇を待ち構へて歸るのだつた。

夜になつてから純吉は、清一を誘つて酒を飲みに出かけようかと思つたが、口先だけの遊蕩兒である身の程を顧みて、うつかりするとそんな處で清一に出し抜かれる怖れを慮つたから、到頭終ひまで、出かけようとは口に出さなかつた。

「一二年前の方が面白かつたね。」

清一がさういつたのは、みつ子が居た頃といふ意味だつた。

「そんなこともないさ。思ひ出すといふ感傷は、何に依らず愉快に思はれるものだがね、さういつて、現在と過去とを思ひ比べてゐることは愚かなことだ。」純吉はいかにも自分は理

性の勝つた者であるといふ風に、そして現在だつて面白いことがあるといふ意味を仄かに知らせるつもりだつた。清一は純吉に好意を示すつもりで云つたのだ。それを純吉が邪まに解釋したのでイ、加減な笑ひでその場を紛らせた。……さうはいつたものゝ純吉の心は極めてもろい感傷に陥つて、切りにうとうと過ぎた日の追想に耽つてゐた。

「そりやアさうだね。」清一はきまり悪さうに呟いた。

「だが……」純吉は云ひかけて息の塞る思ひがした。

二

雨降れ、雨降れ——と純吉は希つたが、日毎に炎暑が増すばかりだつた。朝からギラギラと陽の輝く日ばかりが續いた。だが純吉は毎日缺かさず通つてゐた海を、三日ばかり續けて休んだ。

海の連中と他愛もなく笑ひ戯れることは厭でもなかつたが、それも考へると堪らなく退屈な氣もした。心にもない快活を振舞ふことが一層自分を醜くする氣がした。といつて彼は他人の前では、それを振舞はなければ、自分の愚圖さ加減に堪らなく吐が立つのだつた。

結局自分といふ人格は安價なビエロオである以外には何もない狡猾な昆蟲のやうな人間である——そんなことを思つて彼は憂鬱になつてゐた。だから戀人は忽ち現れても忽ち此方を振り棄てて……あゝ、だが若き日に戀のないといふことは何たる悲惨な光景だらう……そんなことで彼は悶々と暑い日を書齋に寝そべつて打ち過した。そして思ふことは悉く下品な恥しいことばかりだつた。彼は、消えてなくなりたい思ひだつた。

どんなに行儀悪くふんぞり反つてゐてもやり切れない暑さで、純吉の氣持はラッパのやうに筒拔けた。

彼はタオルをふところにおし込んでぼんやり海邊へやつて來た。海の連中は相變らず出揃つてゐて、もう二三回泳いで來た後らしく皆なまぐろのやうに砂に埋れて、野蠻な雑談に花を咲かせてゐるところだつた。

「おい／＼、死んだと思つた純吉が再び現れたぜ、不景氣な面をして——。」野島といふ柔道二段の法科大學生は、純吉を見あげて朗かに笑つた。

「あいつまた戀愛でも始めやがつたのぢやないかしら。」さういつて野島と一處に徒らに笑つたのは木村だつた。木村は、今年もう一年遊んで來年から慶應の野球部へ入つて「ブリリ

アンド・ピッチャア」になるんだと力んでゐるスバルタ型の美男だつた。

やつぱり海へ來て好かつた——と純吉は思つた。

「何しろ純吉は文科大学學生なんだからなア。」野島はさういつて純吉をからかつたが、一寸眞顔になつて、

「文科ツて奴は女にもてるさうだのう？」と木村に訊ねた。

「うむ、非常にもてるツてよ。お前も柔道なんて止しにして、ひとつ文學に志したらどんなもんだい。」木村はまぢ／＼と野島の顔を打ち眺めて、煽動した。

「俺は文科の學生が一番嫌ひだよ。」純吉はさういひながら、彼等と同じ黒い禪をしめてその圓陣に加はつた。「俺あんな學校に入つて沁々後悔してゐるよ、いや學校は知らないが、その文科の學生といふ奴が實にやりきれないんだ。」といつて純吉は一つ息を入れた。

「先づ第一だね、教室へ入るとプンとスエ臭い香ひがするんだ。」

「神経質か、よせよせ、お前が一寸怪しいぞ。」

「いや待つて呉れ——。」純吉は慌て、手を振つた。だが一寸言葉が続かなかつた、そんな説明も面倒になつて、少くとも夏になつてあの空氣から離れてホツとしたことをひとり

味はつた。さうかといつてこの海の連中が好きといふわけでもなかつたが、氣易さだけが有難いと思つた。だが、文科の奴等は嫌ひだとか何とかいつてゐるものゝ彼等に勝つた何の心の取得が自分にあるのか、またこの海の連中に比べて何れ程自分は思慮深いか、兩方の愚劣な個所だけを兼備へた、そしてその他にはたゞ彼等を上ツ面だけで輕蔑するといふ不遜な心しか持ち合せないのが自分なのか——純吉はそんな妄想に走らうとした鈍い神経を慌てゝ吹き飛した。

「ところで島田はこの四五日どうして出掛けて來なかつたんだ。をとゝひあたりからともキレイになつたぜ。なア木村！」

「とても、とても！ それとも島田は柄にもなく御勉強か？」

「無論勉強だよ。俺は君達のやうな不良少年ぢやないからね。」と純吉は云つた。

「ハッハッハ。不良でも何でもいゝから、ひとつ素晴らしい戀がしたいものだ、ねエ野島さん。」

「うん、さうだア！」野島は拳を固めて、わざとらしく胸板をドンとたゝいた。

「おい俺が一つ芝居の科白をやつて見るよ、よく聞け。」木村はやをら立ちあがつて優し氣なしなをつくつた。屹度何か淫猥な事を演るに違ひない、と純吉は想像して皆なと一處に眼を舉げた。

「黄金の羽蟲、蜜飲の蟲、どこからお前は來た？ そんなに私の傍へ寄つてはいけない、お前は何を探してゐる？ 私を花だと思つてゐるの、私の唇を蕾だと思つて。いけない。彼方へ飛んでおいで、森の中へ、小川の岸へ、堇、蒲公英、櫻草、そこには何でも咲いてゐるよ、その中へもぐり込んで酔倒れるまで飲んでおいで。」女の聲色のこはいろのもりなのを、木村は朗々たる男聲で歌ふが如く口吟んだ。「飲んでおいで、飲んでおいで、酔ひ倒れるまで……。あゝ堪らなく好いなア！」彼はさう嘆聲を舉げると感極まつた如く躍かに四肢を延して天を仰ぎ、忽ち翻つてピヨンと鮮かなトンボ返りを打つた。そして砂に顔を伏せた。

「木村、俺にもそれを教へて呉れ、貴様は素晴しく艶かしいことを知つてゐるな。」野島は木村の背中にかじりついた。「島田はあれを知つてゐるだらう、文科だから。」

純吉は、何の思ひあたるところもなかつたが、たゞ薄笑つてゐた。そんなことを語誦してゐる木村を内心大いに感心した。

「飲んでおいで、飲んでおいで、ツと——おい皆なで合唱しよう。」と野島は太い聲で音頭をとつた。その時誰かゞ、

「来たぞく。」と囁いた。

「うむ来たく、木村々々。」と野島は彼の背中を叩いて、そして純吉に向つて「キレイになつたと云つたのはあのことだよ。」と教へた。

掛茶屋へ二人の派手な娘が、經木の帽子を壓へて駈け込んだ。娘達は直ぐに、脱衣場へ入つた。それを見極めると同時に突然野島は「ワン、ツー、スリーツ。」と號令した。すると圓陣の者共は一齊に眼を瞑つて、砂に顔をおしつけた。

「おい、何だい、何の眞似だい。」純吉はのけ者にされた不満を覺えて、それにしても怪しな思ひで野島に訊ねた。

「ともかくお前も早く斯うやれ。」野島はさうすゝめるので純吉も同じく砂に伏して、返答を待つた。野島は、こゝで口を利くのをもさも惜しさうにびつたりと顔を砂に埋めた儘性急に説明した。——あの二人の娘達が脱衣場の中で、着物を脱いで水着を着終る迄の悉くの動作姿態を細大洩らさず沁々と想像するのだ——といふ話だつた。

「只今帯に手が懸り、着物に……。」

「うむ。」待つてましたア。」靜かな吐息を窺つて各々そんな半疊を矢繼ばやに投げかけた。

「叱ツ、専念にく。」と野島は重く退けて、耳を壓へて凝と五體の力を忍ばせた。そして「木村が一番參つてゐるんだよ。」と純吉にそつと囁いた。木村は耳の側まで顔を埋めてゐた。

純吉も命ぜられたまゝに、凝と熱い砂に顔を埋めた。すると彼の眼蓋の裏には、みつ子の古い幻が彷彿として浮びあがつた。——彼は深い溜息をした。——だがまもなく彼の五體は幻とゞもに熱い砂地に溶け込んで、彼は恍惚たる夢心地に墮ちて行つた。さつきの木村の獨白が、はるか微かな耳に、麗朗と反響してゐるばかりだつた。

三

再び野島の合圖で、圓陣は一齊に亂れると各々まつしぐらに水を眼がけて駈けて行つた。二人の美しい娘達は既に彼等の讚美の聲を意識してゐるらしく、嬉々としながら仰山に熱い砂を踏んで渚へ走つて行つた。——男達は忽ち波の彼方に整列して、ワイワイと騒ぎながら見ごとな拔手を切つて進んでゐた。

純吉はひとり砂地に残つて、羨ましく彼等の運動を眺めてゐた。彼は夥しい因循な氣持

に襲はれてゐた。含羞ますに、一投足の勞も執れぬ氣がして、思はず龜の子のやうに首を縮めた。——自分がたつた今罵倒したあの厭な文學々生が取りも直さず自分の姿である氣がして、凝としても居れなかつた。もう明日から海へも來ないぞ——さう呟いて彼は自分の懶い書齋を想つて、變な安らかさを感じた。

—おーい、おーい。」

沖の連中は切りに手を舉げて純吉を呼んだ。その度に彼は身がすくんだ。あまり彼等が呼ぶもので水際の女が、純吉の方を振返つた。——純吉は、ふらふらと立ちあがつた。そして瘦軀を躍らせて、その時稍大きな波が持ちあがつて渚の連中がワツと逃出したところを、彼はこゝぞとばかりに突進した、が忽ち波にくる／＼と捲かれて、頭もろ共イヤといふ程砂地に叩きつけられた。

だが彼は、直ぐにはね起きて、次に持ちあがつた大波の底を目がけて、ピョンと水の中へもぐり込んだ。もぐつた儘はるか波向うに進まうと思つた。

彼は——水の中で眼をぱつちりと視開いた。

水の底が青白く、小石が眞珠のやうに光つて見えた。——やらうと思へば俺だつて快活

た業が出来るさ、家に居るのは一層鬱陶しいから明日も矢張りまた出かけて來ようかな——彼はさう思つた。

もう好からうと思つて彼は、首を振つて水の上に顔を現した。——木村たちは、到底彼には行けないずつと遠くの沖を合唱しながら泳いでゐた。振り返つて見ると、彼は波元から二間も先へ進んではゐなかつた。

(大正十三年三月)

鞭

撻

私は臺所の隅へ駆けこむと、ながしもとで飯の仕度を手傳つてゐる母の袂にとり縋つて——仙二郎と一處に行くのは嫌だ、と云つた。が大聲で喚くわけにもゆかず、たゞ無暗に鼻をたらしめて駄々をこねた。

「どういふわけで、そんなに嫌なの……變だね。」母にさう追求されても私は決してその理由を審かにしなかつた。

どうあつても母は私に同意の色を示さないのので私は不平の餘り口惜し涙を滾すと、プツと頬ツペたをふくらませて玄關へ來て了つた。さうして障子にとりついて、舌で障子の紙を舐めてゐた。

「お父ツちゃん早く行くベエツたらよう、俺アもう飯なんぞ喰ひたかアねエだよ、こんなにぐづぐづしてゐたら競馬はおしめ、エになつちまふづらアな。」

次の茶の間で祖母と話してゐる父親にかぶり付いて切りしきりに仙二郎は強情をはつてゐた。

仙二郎の聲はキイ／＼と高い調子で、カツと他の聲を壓へつけて了ふ騒音だつた。

何といふ憎い聲だらう——私はさう思つて思はず顔を擧めた。

「今朝ツからどうもこれに酷い目に遇ひつゞけで……おま加まけに今日は馬車がおそろしくこ混ん

で、その中で始めから終ひまでこの通りで、もうさんぐでござんした。」と云ひながら父親は「仙二郎、おとなしくしねエか。うちぢやねエんだぞ。」と叱つたが少しも父親の威嚴は徹はらず却つて仙二郎はワツと大聲を擧げて父親の頭をボカ／＼と殴つた。

「仙二郎は赤ン坊の時分から阿父ツさん子だつたから無理もないさ、この位のうちは誰も皆なおなじでね。」と祖母が云つた。私は強く自尊心を傷けられて獨りでムツとした。

そこ／＼に飯を終ると仙二郎は玄關へ飛び降りてハダシ足袋をはいた。

「サア！ 信ちゃん行くベエ、お前エは服を着て行かねエのか？」

仙二郎は柿色の水兵服を着てゐた。ズボンが長い爲か、それとも身軽く装ふ爲か、キユッとたくしあげて上着をその中におし入れた上から太い縮緬のさんじやくを締めてゐた。後から見ると臀の格好がはつきり解つた。

「僕は未だ飯を食べないから行かないよ。」と私は答へた。私は普段大概自分のことを「俺、俺」とよんでゐるにも係はらず「僕」と云つた。

「飯なんていゝやな。俺がまんじゆうやなんかを持つてゐるからあツちへ行つて一處に喰ふべエよ。」仙二郎はさう云ふと、大日本軍艦三笠といふ金文字が並んでゐる黒いリボン

巻いた水兵帽を無造作に頭へのせた。

祖母と母はたゞならぬ氣色で私を叱つた。私は自分の肚を見透されたのぢやないかしらと思つて酷く怖れた。で私は仕方がなく着物を着換へさせられて了つた。私は明らさまに怒ることも出来なかつたもので、こんな帽子ぢや嫌だとか草履が汚いから他所行の雪駄を出して呉れ、などと云つて、その通りにさせた。

「信ちやん何處へ行くんだい、競馬へ行くのか。」往來で友達が聲を掛けても、私は素知らぬ振りをしてスタ／＼と歩いてゐた。

「うん、さうだよ、お前エ達も伴れてツてやるべエか。」仙二郎はそんなことを云ひながら肩をそびやかかせて眞先へ歩いてゐた。うしろに垂れさがつてゐるリボンがヒラ／＼と暖い風に翻つた。

「信太郎さん、お前さん腹でも痛いんぢやねエのか。痛かつたら私が薬を持つてゐるからやるぞ。」競馬場の棧敷に陣取つてから仙二郎の父親がさう云つて私の顔を覗きこんだ。私はホロリと涙を滾した。——何といふ自分は見下げ果てた心の持主だらう、と先刻から密かに苛責の念に苛まれてゐた心が頼りなく流れ滾れたのだつた。立身出世をする人物は子

供の時分から粗衣粗食に甘んじて常に楽しく働む者である、といふ風なことをいつも祖母から教へられてゐた。そんなことも思ひ出されて暗い氣持になつた。

「これを呑んで見な。これは腹痛みばかりでなく氣分の悪い時には何でも利くんだから。」呑みなツたらよ、すぐ治るよ、苦くも何ともありアしねエだよ、信ちやん。サア呑みなツたらよ。お父ツちやん俺が出してやるべエよ。」仙二郎は直ぐに此方に氣付いて父親の手から信玄袋を奪ひ取ると、苦茶々々な紙をひろげて赤い丸薬を三粒ばかり撮み出した。私は、そつと隣りの棧敷の方を窺つた。——さうして黙つてそれを受けとると、眼をつむつて冷たい茶で一息にグツと呑みくでした。

「おなか少し痛いんだ。」と云つて、私は仙二郎の父親の膝に打伏した。

「赤！ 赤！ 赤！ しつかり／＼。」仙二郎は突然さう叫んで躍りあがつた。「お父ツちやん甚太郎さんのあかがやつぱり一番速いや。」

「競馬をやるべエか。」歸りの坂道のところで仙二郎が私にさう云ひ掛けた。餘り人通りもなかつたので私は、

「やらうか！」と答へた。

「どつちが速いだらうな、やつて見な。」と仙二郎の父親が云つた。

一二ツ三― と仙二郎の父親が云ふがいなや二人はまつしぐらに駈け出した。足袋踏の仙二郎には私はとても敵はなかつた。忽ち私は五六間も追ひ抜かれて了つた。仙二郎は、馬の鬣をしごくやうに左の手を前に出して切りに動かし、右の手では鞭を打つやうに「ハツシ―ハツシ」と云ひながら臀を叩いて駈けてゐた。私もそれを真似して懸命に駈けた。

私は手の平にウンと力をこめると、その痛さが全身に響き渡る程強くピシリ／＼と臀を引ツばたいた。――悪い心を叱り飛すのだ……さう云つたやうな小氣味好さが犇々と胸に迫つた。

(十一年四月十三日)

或る五月の朝の話

「シン！ シン！」

110

夢の中で彼は、さう自分の名前を呼ばれてゐるのに気づいたが、と同時にギョツと頬ツペたをつねりあげられたので、思はずぎよツとして眼を見開いた。——Fが酷い佛頂面をして彼を睨んでゐた。彼は、縁側の椅子に凭れてうたゝ寝をしてゐたのだ。

「失禮だ！」とFは叫んだ。「私はもう横濱へ歸る〜。」

「Fはあまり短氣すぎるよ。」
彼は、一寸具合が悪かつたので、云ひたくもない獨言を放つて、椅子から身を起した。そして彼は、酷く六ヶ敷氣な澁面をつくつて、自分だけのことを考へてゐるんだといふ風に、晴れた空を見あげた。五月の薄ら甘い朝の陽が、爽やかな感觸で、さつき剃刀をあてたばかりの彼の頬にヒリヒリと、光るやうに沁みだした。

「お前は若い梟だ。——お前は頭が鈍いから説明してやるが、私は愚といふ言葉の代りに梟を用ひたのだよ。」

さう云つたFは、餘程疝癢を起してゐたと見えて、二つの拳を胸の前で「馬鹿ツ！」と叫ぶ變りに、力を込めて、打ち振つた。

「説明をするとは大變な侮辱だ。」と彼は、さもさも自分は物解りの好い男だといふやうな不平顔を示した。だが、まつたく彼は、説明なしに「お前は若い梟だ。」と云はれたならばこれを或る種の讚美と誤解したに違ひなかつた。

「私はお前に侮蔑を捧げたのだよ。お前は軽くて上品な洒落の解らぬ哀れなジャップだ。」

「僕は洒落をもつて他人を嘲笑するやうな不正直は大嫌ひだ。」

彼は向ツ腹をたてゝ斯う怒鳴つた。

「お前の父のH・タキノはお前に比べると何れ位の交際が上手だか知れないよ。」

「無論僕は交際上手ぢやないよ。まして僕はお前の國の習慣なんて一つも知らないよ。」

「私と交際し始めて、もう二年になる。いくら梟だつて二年も實地練習をすればいくらか解りさうなものだ。」

「此方のことだつて解りさうなものだ。」

「解つてゐるさ、お前は怠惰で、そしておべつかつかひだらう。」

「おべつかつかひだツて！ それは僕を讚めた言葉なのか？」

正面でばかり、斯んなに無神経で饒舌のヤンキー娘に物を云つてゐるのは馬鹿々々しく

なつたので彼は、こゝで氣持を轉換させて、狡猾に笑ひ返した。Fも、到頭噴き出してしまった。

「だが——」彼は、もう一息壓へて置いてやらうと思つて、眞顔になつて「だが、僕はFが想像してゐるやうに、決して柔順なFのピエロオぢやないよ。」と云つた。

「もういゝく。Fは、唇の端で軽く笑つて、彼の肩を叩いた。

Fは、彼の家の珍客だつた。彼の父が米國に居た時Fの父とは學校からの友達だつた。Fの父が横濱に店をもつてゐたので、二年も前からFは日本に來てゐた。前から彼は、Fと知り合ひだつたが、外國人に對して非常に臆病な彼は、つい近頃までFと親しめなかつた。——Fが彼の家を訪れたのは、これが初めてだつた。もう一週間近く滞在してゐた。

そんなお客が來るんなら私達は逃げ出さう——家の中で牛肉を煮ることすら決して許さない彼の祖母は佛壇に錠を下して、彼の母を促して温泉へ行つてしまつた。彼の父は、忙しくて殆ど家を空けてゐた頃だつた。

彼の家は、草葺家根の古い家だつた。長押には煤のかゝつた黒い槍が懸つてゐた。寢る時には電燈を消して、昔ながらの塗のはげた行燈を用ひてゐた。その家の中が、Fの來訪

以來奇妙な白さを醸した。——それでも彼が勉強机にセセッション型のテーブルと椅子を用ひてゐたので、それを座敷の眞中に持ち出してクロスを懸けて、食卓に代へ、Fは彼などの名も知らない西洋花を買つて來ては毎朝取り換へて、飾つたりした。父は建具屋に頼んで、涼み臺のやうなベッドを拵へさせたり、自分が外國に居た時用ひた色のさめた羽根蒲團を持ち出したり、便所の腰掛をつくつたり、座敷の隅に洗面臺を据ゑたり、床の間の懸物を鏡と取り換へたり、風呂場に錠を付けたり、臺所には怪し氣なオーブンを据ゑて、Fが伴れて來たアマさんが不平さうな顔で料理を拵へたりしてゐた。——それでも、どうやらFの起居に堪へられるだけの設備を整へたが、まるで家の中は奇術の舞臺のやうになつてしまつた。

「ほんとに僕は、眠くて堪へられないんだ。許してくれ、一時間でいゝから眠らせて呉れないか? Fと一緒に朝飯を食へるといふことは僕に取つては何よりも努力なんだよ。」彼は、さう云ふと頭をかゝへて再びどかりと椅子に落ち込んだ。——前の晩の夜更し、あの馬鹿々々しい騒ぎ……そのことを夢のやうに思ひ出して、彼は酷い冷汗を覺えた。

……晝間になつて、いか程白々しく鹿爪らしい顔をしてゐたつて、夜になればあんなに

も他愛なく酔ッ拂つて、あんな騒ぎを演じるんぢや、これはどうもFに輕蔑されるのも無理はない……彼は、後悔の念に驅られながら密かに呟いた。「俺のやうな柄の男が、第一西洋の娘と交際するのが間違つてゐるんだ。だが今更そんなことを考へたつて始まらない、兎も角もつとテキパキと、ニッカポッカの如く晴れやかに振舞つてFの度膽を抜いてやらなくは口惜しいぞ……。」

「シン、シン、シン！ 眠つちや駄目だよ。」

Fは、けたましく脚を踏み鳴した。

「一時間の猶豫を與へて呉れと頼んでゐるぢやないか。」

「厭だ〜。——あゝ、私、キユウカンボが食べたくなつたから、庭へ降りて剪つて來てお呉れな。」

彼は、よくは知らないが、また失禮だなど、云はれるのも厭な氣がして、異人流を重んじてやるつもりで、厭々ながら花鋏を取つて、小さな裏の畑から胡瓜を剪つて來た。

Fはナフキンで、ぞんざいに胡瓜を拭ふとその儘、白い齒をむき出して美味しさうに食べた。Fは、手持無沙汰になると丁度彼が煙草でも喫ふやうに、少くとも毎日十本の胡瓜

は食べただらう。

「お前もお食べな。」

Fは、さう云つて二本ばかりの胡瓜を彼に差し出した。彼は、相手にしなかつた。

「こんなに輝いた朝だから、これから海邊へ行つて見やうか、ランチをつくつて貰つて。」

「厭だ。」と彼は物憂げに答へた。知つた人にも會ふと氣恥しい、とも思つたのだ。

「お前は、ほんとうの鼻だね。夜にならないとその眼を大きく開かない。」

「あゝ、早くフア、ザアが歸つてくれれば好いな。」

「シンにはお友達は一人もないの？ 稀にはお茶の集り位ゐたらどうなの？」

「此方には一人もなくて寂しいんだ。だからFが來てゐると幸福なんだ。」と彼は云つて獨り揆ぐつたく思つた。これ位のお世辭を振りまかないとFには通じぬらしい。彼が、思ひ切つた誇張の言葉を拵ひても、彼女は極めて自然にそれを享けた。その落着きと云はるか無神経と云はうか——それには彼も壓倒されたが、また別に呑氣で面白かつた。思ふさまの齒の浮く科白をペラペラと云つてのけ得る相手として、彼は一寸面白くもあつた。

「尤も東京へ歸ると友達は澤山あるよ。」と彼は、安價な虚榮心から出鱈目を附け足した。

「ぢやお前は、もう東京へ歸りたくなつたらう？」

「あゝ、歸りたくなつたね。」と云つて彼はにやにやと賤しい笑ひを浮べた。そんな因循な反語的態度を知らない快活で正直なFは、

「おゝ、それは困つた！」と鮮かに眉を擡めた。「課業の方は自由なの？」

「ボートレースの準備で、當分休講だ。」

「お前はレースには出ないの？」

「出ない。」

「お前は運動は不得意なの？」Fは一寸峻しい眼付をして、彼の返答を待つた。不得意には違ひなかつたが、不得意だと正直に答へてしまふのが、彼は具合が悪かつた。常々彼はFの趣味におもねつて、いかにも自分は運動好きの快活な若者であるといふ風に見せかけてゐたから――。

「僕は、思索が得意なんだ。」と彼は苦し紛れに答へた。Fは少しも可笑しがらずに、

「ぢやお前は詩人なの？」と訊ねた。

「……」彼は思はず、顔をあかくして口ごもつた。

「Fは詩人が好き？」彼は、急に蚊のやうに細い聲で怖る／＼呟いた。

「私は、アラン・ポーとウオルズワルスと、ジョン・キーツとそしてバイロンの詩は好きだ。」と躊躇なく云ひ放つた。何々と何々との詩は、――と「は」で断定し切つたFの度胸で、彼の心は一撃の許に震へてしまつた。そして内心Fの博學に舌を卷いた。……此方の無學を發あはかれぬうちに一刻も早く話頭を轉じよう……と彼は思つた。夫々の詩人の特質どころか、學校でキーツの講義だけは少しばかり聞いたが、生憎教師が低い聲で、末席にばかり坐つてゐる彼には教科書に假名をつけることも出来なかつた。

「お前は誰が好き？」

「僕は日本の白秋・北原は好きだ。」

「お前自身は詩は作らないの？」

「嘗て、一度も……。」

「そして今後は？」

「多分駄目だらう。」

「お前は、たつた今思索が得意だと云つたが、それは主に哲學的思索なの？」

「……」彼は、空腹に酒を呷つた時のやうにカツと顔のほてるのを感じた。彼は漸く口を動かして、

「Fは哲學者の本も讀んでるの？」と訊くことで返答に代へた。

「私は哲學者は一人も知らない。」

彼は、吻ツと胸を撫で下した。「僕は全體系統的には讀んでゐる。僕には近代のものよりもどうもグリークのクラシックの方が面白い。」

こゝで多少の智識でもあれば得々と辯じたてようと思つたのだが、生憎彼はそれ以上云ふことは無かつた。

「でも僕はそれらの哲學者を研究しようなんて少しも思はない。」

「お前の思索の得意ツて、一體何よ？」

「形はない。」厭に言葉にこだはりやアがつてうるさい女だ——と彼は思つた。此奴、案外俺の腹の空ツぽを知つてゐて、遠廻しに嘲笑してゐるのかな……そんな邪推を廻らせたりした。そんならそれで、此方にも了見があるぞ——彼は、薄ら眠い頭の隅に、出たらめな力を忍ばせたりした。そして彼は、一寸Fの顔を見あげた。彼の椅子の肘掛に半分腰掛け

てゐるFは、微笑を湛へながら庭を眺めてゐた。その白い顔には、まともに陽が射してゐる爲か、頤から頬へかけての輪廓が、水蜜桃のそののやうにふはりと滲んで見えた。

「お前の思索なんて怪しいものだ。」とFは云つて、彼の顔を見下した。畜生奴！ やつぱり俺が想像した通りだつたんだ——彼はさう氣附くと、たつた今忍ばせた力は突然何處かへ吹き飛んでしまつて、わけもない氣恥しい氣持ばかりがグツと喉に詰つた。そして彼はFの青く澄んだ眼を、思はず見あげた瞬間には、極めて女々しい涙が胸中に擴つて行く、奇妙な恍惚感に打たれた。

「また眠らうとする！」

Fは、鋭く彼の肩を握つた。

「あゝ、俺は白痴だ。」そんなことを彼は呟いた。

「それで、お前の學校のポートルースは何時何處であるの？」

「未だそんな話か！」彼は太い溜息を洩した。そして彼は如何にも面倒臭さうに顔を擧めて「スミダ川、スミダ川。」と云つたきり、憤ツとして面をそむけた。

「お前は普段スポーツが好きだと云つてゐるが、そんならお前は何のチャンピオンなの？ 私のやうに馬には乗れないし、テニスは私の不熱心な弟子だし、ビリヤードは二十だし、思索は悉く妄想で、おまけに無學で……」

何とでも云へく——彼は、眼をつむつてゐた。

「私の友達に紹介したくも、餘りに行儀が悪く、婦人の前ではお茶も飲ませられない。……それにピクニックはおろか、公園の散歩すら不得意！」

「水泳なら相當のチャンピオンだ。」彼は、口惜しさのあまり斯う叫んだ。これなら大丈夫だ——と彼は思つた。うっかり他のことを云ふと、試される怖れがあるが、水泳なら今は五月のことだし、どんな法螺を吹いても失敗するおそれはない——咄嗟の間に、もう頭がすつかりぼんやりしてゐた爲か、これもうっかり彼は叫んだのだつた。

「おー！」

Fは雀躍^{こぞ}りして彼の手を取つた。「ベリイブライト、ベリイブライト、さつきの私の罵りを許してお呉れ！ 私は水泳の一哩のチャンピオンだ。そして、それは、私の凡てのスポーツの中で一番得意な業だ。——お前は何哩だ？」

「二哩だ！」と彼は夢中で答へた。實際の彼は一町も完全には泳げなかつた。

「私は幸福だつた。」とFは云つた。「今年の夏は私の鎌倉の別荘に是非来てお呉れ。そして私の水泳の教師になつておくれ。」

彼の胸は、異様な戦きを醸した。——「よしッ！」と彼は下腹に力を込めて決心した。

……夏休みになつたら、直ぐさま何處か遠方の水泳場へ出掛けて、萬事を擲つて専心泳ぎを練習するぞ、一ト月で上達するだらう、そして……そして——彼は様々な幻を描いて、馬鹿氣た興奮をした。「よしッ、俺も男だ。」そんなことを胸で呟いたりした。

「お前に、そんな技量があるとは私は夢にも知らなかつた。」

Fはさう云ふと、平手で軽やかに彼の頬をはたはたと叩いた。……彼の興奮は次第に、涙ぐましく溶けて、その甘さはいつか情けなさに變つて行つた。

「夏になつたら山の温泉にでも行つてしまはうかな——。」ふと、彼はそんなことを思つた。

Fは、お午のテーブルを手傳ふのだと云つて臺所へ走つて行つた。——彼は、椅子から離れず凝と庭を眺めてゐたが、間もなくとうとうと快い假睡に迷ひ込んだ。

「お午の仕度が出來た。早く濟まして、海邊へ遊びに行かう。」さういふFの聲に氣づいた

彼は、今度は極めて機嫌よく、
「あゝ、行かう。」と答へて、勢ひよく立あがつた。その彼は、立ちあがると、さつきFが
残して行つた一本の胡瓜を、何氣なく取りあげると、見るからに當然らしくそれをコロコ
リと噛みながら、悠々と茶の間へ入つて行つた。
Fが横濱へ歸つた翌日から、彼は疲勞のあまり病氣になつた。——胡瓜を見ると、むし
づが走つた。

(十三年五月)

公園へ行く道

「散髪して来よう。」

さう、思ひつくと、彼は、膝の上の夕刊を投げ棄て、安座からむつくりと立ちあがつた。立ちあがつた彼は、如何にも退屈らしく「ウーム」と云つて大きな伸びをした。その彼の伸びは、彼が故意にさうしたのだつた。立ちあがつた動作が餘りに唐突で、——といふ氣がした彼は、ふと叔母の視線に觸れて、ひよいと軽いながらも白けた感じをうけたので、それを、安易さをもつてナチュラルに解決しようといふやうな心で、さうしたのだつた。

「勉強？」叔母は縫物の手を止めて、彼に釣り込まれて思はず休息したかのやうに、兩肩をこゝろもち落して彼の方を見あげた。丁度、彼の伸びが終らうとしてゐるところだつた。隣りの家から琴の音が洩れてゐた。冬が終らうとしてゐる靜かな生温い宵だつた。叔母は、直ぐに手の先を動かし始めてゐた。

さうと、叔母に何氣なく云はれて見ると、彼は無意味な不安を感じた。

……俺は今、寢轉むだ儘、退屈を紛らすために、叔母を相手に極めて無意味な話だけをしてゐる、叔母は十分な、俺の相手である。二人は二人の間の雰圍氣を同程度の力を分け

て各々保つてゐるのである。然るに叔母はさうしてゐながら立派に自らの仕事を運むで行く。つまり俺の全部の力は叔母の何分か一の力に依つて容易く限定されてゐるわけである。「ほんたうだ。……」

一刻前彼はそんな愚考に割合に強く焦かれて、たしかたつたそれだけの原因で、寢轉むでゐた状態を安座に戻したらしかつた。——それから、今ふと立ちあがつたのである。だから彼は、「散髪に行かう。」と思つたことは、その妙な焦燥に似た心に對する言譯のやうにも感ぜられて、伸びが終つた頃にはもう出掛けることは太儀な氣がした。

『もうそろそろ試験でせう？』

『うゝえ』

『だつて……。』

もう少しで彼は叔母に酷いことを云ふところだつた。——が、帯を握つた兩腕をウンとこきおろしながら、相對的の調子を強ひて含めずに、

「こりやどうも少し飯を喰ひ過ぎたぞ、ウーン。」と、そんな獨り言を呟くと、また、坐つてしまつた。さうして鐵瓶の胴腹をピンピンと指先ではじいた。

「降るかしら。」と叔母は云つた。

そんな質問に答へるのが「寂しい」やうな気がした彼は、黙つたまま、努力してその自らの心を傍觀しようとしてゐた。

「夕方から急に陽氣がゆるんで来たから、こりやあ、どうもあやしいよ、雨だよ、屹度。」
 まだ叔母はこりずに、と彼は思つた。——と、彼は、こんな些細な茶飯事に……であればあるだけ自らの愚かしい邪推が氣の毒になつて、酷く自分を憎むだ。けれど、かうなると僭越な心ばかりが先に立つて、叔母と調子を合せる爲の決心の裏は倦怠ばかりではあつたが、仕方がなく、

「降るかしら？」と、叔母の言葉を追ふことで辛うじて答へた。さうして彼は、叔母の方を見た。叔母がこれに答へないでも其場の雰圍氣は極めて自然なものであつた。叔母は、セツセツと手の先を動かしてゐる。そこに、彼は親しみを見出して、初めて安心な沈黙に浸つた。たゞ極めて空漠と頭の中が軽かつたので、彼は、その軽さに重味を加へたいやうな気がした。

三分間の後（實際彼は、柱時計の針がそれだけ動いたのを見てゐた。）彼は、「降るかな？」

或は降るかも知れない？ それとも持ち續くか？」そんな風に、さつき叔母の提言したことでだけをしきりに考へてゐるばかりの自らを見出した。

彼は、巧みに動いてゆく叔母の針の先を、眼バタキをしないで眺めてゐた。見てゐるといふ事實とは全く別に、たださうしてゐる眼の感覺が快かつたので、彼はその甘さを味はつた。

「俺の神経病にも困つたものだ。」と彼は思つた。然し、實際の彼の頭は、彼が、病氣だなどと思ふ程神経的でもなく、その言葉からうける繊細な鋭さからは反對な——だからその意識外の半面は甚しく茫漠とした白々しい愚昧さのみであつた。

パチパチと仰山な眼バタキをした彼は、見るからに惱ましげに眉を擧げて、片方の人差指で顛顛を突きながら欄間の古い額を見あげた。

「涵虚混太清」と書いてある不氣味な文字の額だつた。解釋は考へなかつたが、莫迦にその額が不快な気がした。

「何處かへ出掛けるの？」彼がその室を出ようとした時に叔母が斯う尋ねると、

『ええ、ちよいとそこまで。』と彼はかう答へたら必ず叔母は不安を抱くに違ひない、と思ひながら、ワザと酒々と云つた。叔母の口先や態度に「監督」といふ色合の見ゆるのが彼は氣に喰はなかつた。尤も前の年の試験に落第したので、両親の手前は勿論、その依頼を享けてゐる叔母の手前に決して「口はばつたこと」の云へる境遇ではなかつた。

それなのに、こんな些細な言葉尻に、もう彼は憎懣を覺えて、實際今立ちあがつた時は、二階へ行つて試験の勉強をしようと思つてゐたにも係はらず、そんな答へをしてしまつたのである。で、彼は「仕方がない散髪へでも行かう。」と思つた。「もつと何か面白い處があればいいな。」とも思つた。

机の上には友達から借りて來たノートが三四冊積み重ねてあつた。一冊は、うやうやしく擴げて、赤い鉛筆などがその傍に置いてあつた。時々叔母がそれとなく覗きに來る場合の要心に「道具立を配して置いたこと」を見ると情ない氣持がした。

翌日中にそれ等のノートは返却しなければならぬことを思ふと、彼の心は苛立たずには居なかつた。

「こんなものは他愛もない。」そんな自慰的な自惚れと、時間の切迫から享ける物質的な怖

れとで、

「兎に角やらう、一気に。」と呟かせられた。坐りながらコツンと力を籠めた拳固で軽く自分の頭を擲つた。

.....

ノートに専念に眼を曝した彼は、「専念に」といふ心の働きの唯一の努力の對照になつてゐて、だからそれが極めて技巧的である事に——我慢はしようとしたが……もう、その愚かな我儘に打ち勝てなかつた……彼は、「まあ、好いあんばいに……。」と思つてゐるに違ひない階下の叔母を想像した。

で、彼はその叔母の微笑を、ふと思ふと、「ちよつと、そこまで」と云つて室を出た時の自分を持ち続けなければならぬ氣がした。理性では明瞭に、こんな莫迦氣た自尊心などと打ち消したが……そんなくだらないことを考へてゐるうちに、それが何だか妙に愉快なやうな滑稽なやうなすがすがしさに似た心が湧きあがつてきて、彼は意味もなくセ、ラ笑つて立ちあがつた。「兎に角散髪して來やう。」と思つた。

タオルを懷ろへ入れて玄關へ來ると、ふと氣附いたやうに、帽子と外套とを手にして、

『ぢや叔母さん、ちよいと行つて來ますよ。』と、彼は大きな聲を張り舉げた。その外出に就いては好ましからぬ疑念をさしはさむである叔母は、わざわざ玄關へ走り出て、

『あんまり遅くならないやうにね。』と、迂散な眼附で彼の外套姿を眺めた。

イ、氣味だ、と彼は思ひながら、

『えゝえゝ』とばかりに空々しくうけ流しながら愴惶と潜り戸を脱け出た。叔母が邪推してゐるとほりに、情人があつて縦令遊里の女とでも氣軽く遊べるだけの氣の利いたところがあつて、こんな場合に金さへ十分にあれば氣持も何もあつたものぢやなし……などと、こんなことを考へ始めると、どんな無理をしても遊びに行き度い氣持ばかりになつた。……考へて見ると近頃毎晩のやうに、こんな風にフリリと家を出てはカフェーで時を費したり活動寫眞へ入つたり寄席へ入つたり芝居の立見をしたりなどしては大概家へ戻るのほ早くても十二時近くだつた。實際は散歩などにたつたひとり出掛けるのは嫌ひなのであつた。

「ひよつとすると遊べるかも知れないぞ。」

ふいとさう思ふと、未だそれが果してどうとも見當が付きもしないうちに彼の胸は嬉し

さの餘りワクワクと躍つた。「行くこと」の恍惚にだけ浸つて、「行けるか、行けないか。」そんなことを打算することすら面倒だつた。

彼は懐ろから財布を取り出すと細かいものまで丹念に計算を始めた。月の始めだつたので一ヶ月分の小遣が大部分あつた。それに彼は（叔母達の豫想とは全く反對に）可成りケチ臭くて精算的だつたし、それに遊びなどは殆ど経験もなかつたし——その時計らずも「辛うじて遊び得られさうなだけ」の分量の金を自分が持つてゐることを見出すと急に「嬉しい世界」を發見したやうな氣がした。彼の胸は無性に躍動した。——様々なロマンティックな情景を想像したりした。

「第一に齒切れよく、と。」そんなことを考へた。口のうちに歌をうたつて見たりした。彼は慌てゝ家へ引き戻つた。

『ちよつと忘れ物、ノートで。友達に尋ねなければならぬところが。』

彼は斯うきつぱりと、あるきまつた對照の爲に嘘をつくことの出來たことが愉快でならなかつた。

『三冊程本を、今晚買つて來たいんですが、叔母さんちよつと七圓程出して下さい。』

これで彼は用意の分を作った。

『十圓なんだけれど——三圓あつて？』

『さうですね。』と、彼は財布を驗べて、確かに三圓はあつた癖に、

『さあ……？』と言つた。

『ぢや歸つて來てから。』と言ひながら叔母は十圓紙幣を彼に渡した。彼は叔母の此の言葉から何となく輕蔑された苦々しさを感しながらも、この三圓で偶然にも更に安心の程度が高まつたのを悦んだ。

ノートを取りに行くことを装つて彼は二階へ上ると、キョロキョロと階下に注意を配りながら、そつと行李の底から他所行の着物を抜き出した。

『歸りに、若し時間があつたら床場へ寄つて來ますから、兎に角少し遅くなります。』と彼は云つた。一刻前には「散髪へ行くこと」が叔母への唯一の祕密であつたのに、今度はそれが極めて順當な方便の爲の嘘に變つたことも彼は餘りにアツケなくて可笑しかつた。「莫迦だな、俺は。」といふ氣がしたが、それが爲にセンチメンタルな理性に引戻るには餘りに彼はセンチメンタルな華かさに興奮し過ぎてゐた。

『ぢやいくら遅くなつても開けて置くからね、寢てはしまふけれど。』先程彼を送り出した時の態度とは打つて變つた叔母は、安心したやうに言つた。

電車に乗らうとしたが、ふと止めて、彼はスタスタと歩き始めた。濱町の角まで來て始めて彼は、兩國の方へ行かうか、それとも水天宮の方へ行かうかと思つた。人形町の通りにもいつも彼の行く理髮店があつた。家を出て、此處迄來る間「遊び」の事は考へて居なかつたやうな氣がした。

『先へ頭を刈つてそれから行かう。』と、決心して、水天宮の前迄電車に乗つた。

五の目で縁日だつた。ピーツといふ風船の笛が遠くに聞えた。床場の五六間手前に來た時に彼は帯の間から時計を出して見た。「そんな間はない。」と思つた。頭を撫でて見るといくらかザラザラしてそれがひどく氣になつたので「大急ぎで顔だけ」と思つたが、何だかぢつとして椅子にヒックリ返つてゐることを思ふと、その間が堪らない氣がした。理髮店の親爺が非常に饒舌なお世辭者であることも思つた。

彼は、スツとその前を行き過した。家へ速かに歸り度いと思ふ氣持のみになつた。叔母に對する道義的な氣持が浮びあがつて「ああ、サッパリした。」と、刈りたての頭を叔母

に示す時の健全な快さが沁々と想はれた。試験のこともひどく氣になつた。

が、また彼は何やら思ふと、一寸立止つただけで引戻さずに歩き始めた。もう、その時の氣持は彼自身には解らなかつた。強ひて言へば、自分の氣持などを考へることが面倒で且餘りに莫迦氣てゐるのが醜く感ぜられたやうであつたが、單純な彼の頭腦の働きはたつたそれだけのことでもうこんがらかつてしまつて、その原因である些細な情實までは想ひが至らなかつたのである。白く茫然とした頭を持ち續けて歩いて居た。

彼は、堀留三丁目の電車の停留場迄來てしまつた。「ああ俺は矢張りあの照子のことを思つてゐる。」斯う氣附くと彼は自分ながらひどく癢に觸つた。「あんな奴何だい。」

が、かうなるとどうしても寄らずには居られなかつた。「何か言譯になりさうな用事はなにかしら。」と、しきりにそれを考へながら彌生町の方へ折れると、直ぐ其處の路次先にある照子の家へ近附いて行つた。

.....

彼が茶の間へ入つて行くと照子はたつた獨りで、長火鉢と離れた燈火の下で瀬戸物の火鉢に凭り掛つて演藝畫報を見て居た。

『叔父さんは？』坐らずに彼は斯う尋ねた。

『まだよ。』

『で、阿母さんは？』

『アラ、純ちゃんは家から來たんぢやないの。』

『ああ。』と彼は言つた。

『さつき純ちゃんところへ行くんだつて出掛けたのだつてさ。』

『叔父さんは歸りは遅いかしら？』

『どうだか、なんでも此二三日莫迦に忙しがつてゐるやうだから屹度遅いでせう。』

『そいつあ弱つたな。』彼は照子の火鉢へおよび腰の儘、慌しげにガサガサと兩手を揉みながら翳した。

『お留守居とはしをらしいね。』一刻前の妙な憂鬱などは可笑しい程他愛もなく吹き飛んでしまつた彼は、浮々とした下品な調子で言つた。

『嘘よ、妾だつてもう先程歸つたばかりよ。』

『山下さんとお芝居か、例によつて。』

『冗談言つちやいけないよ、あんな奴とはとつくに喧嘩しちやつたわよ。』

『ほう！ 素晴らしい権幕だな。』と彼が云ふと、

『實は、しようと思つて居るんだよ、だつて餘り彼奴厭らしいことばかり言ふんだもの。』と照子は言つた。彼は、照子はその山下とかいふ男とほんたうに喧嘩をしまへばいい、と希つた。

『そんなことだらうとは思つたがね。』彼は少し芝居氣を離れて冷笑した。

『明日山下さんの下宿へ遊びに行つてやらうかしら。』と照子は言つた。山下といふ男のことをよく照子は口にするが、實際は照子が言ふ程それと親密ではないことを彼はよく知つてゐた。それに就いては彼は内々照子の友達などにそれとなく様子を尋ねてあつたし心配する程のことはない確證は十分（何でも照子の友達の處で歌留多會で二三度遇つただけで個人的な交際は全然ないのである。）なのだが、うつかりさうした方面で戦ひを求めて行つたりすると——その言葉だけと見ても酷く嫉妬せずには居られない極めてキハドイ事を平氣で照子は言ふので、それを聞くのが怖ろしくて、彼はその勇氣はどうしても出ないのである。

彼は、一寸黙つてしまつた。「ほんたうに行きはしないかしら。」と思ふと、たゞその幻想だけで、ムカムカと涙が込み上げて来るやうな嫉妬を感じた。

『ああ、お腹が空いた。』

『奢つてやらうか、今日はかう見えても多少ウエルシイんだぜ。』

『へえ？ まあ珍しいわね、純ちゃんに御馳走になつた事があるかしら、ほんたうに。』

『だからさ。』

『だつて後が怖いわ。それよか此間貸してやつた五圓を返して貰はうか、そんなにお金持なのなら。』

『まあ、そんなケチなことは無しさ、ところで何だい？』と景氣よく彼は口走つたが、

『ちや出掛けようか。』と照子に言はれて見ると急に厭になつてきて、

『さうだねえ。』と生返事をした。

『俺の顔少し赤かないか。』

『ちつとも。』

『もう少し飲みたいやうな氣もする。』

『何處へ行つて來たの。』

『……………』彼はワザと意味ありげにニヤニヤと厭な笑ひを浮べた。

『純ちゃんは餘り赤くならない方ね。』

『さうさ。』

『兎に角洋食で勘忍してやるわ。お里が今お使ひから歸つて來るから……………』と言ひながら照子は立ちあがると、箆笥を引き出して、最初出した羽織が氣に入らないで、また別のを出して着た。

『どつかその邊だぜ。』

『厭なこつた、Tでなくつちや。純ちゃんはみつともないつてことを知らないから厭なんだよ、うつかりすると。』

『歩くのが厭なんだよ。』實際彼は、こんなところまで歩いてしまつて可成り草臥れても居た。

『何言つてんのさ、ケチ！』斯う照子に言はれると彼は、全く（照子の豫想外に）さうで

あるより他はなかつたので、テレかくしに、

『ハハハハ。』と笑つた。その笑ひを照子は善意に取つてゐることは云ふまでもない。

『照ちゃんは未だ御飯を食べないのか？』

『撮み喰ひばかりしてゐて忘れちやつてえたのよ。それに阿母さんが歸りに何か買つて來る筈になつてゐるんだけれど、どうせ碌なものぢやないからさ。』

『いよいよ持つて堪らねえぞ。』とは言つたものの彼は決してそれほど冗談ではなかつた。

照子と肩を並べて歩くことを想ふと、彼は嬉しいには違ひなかつた。照子の後ろ姿を見上げながら彼は「或時の夫の氣持」を想像したり味はつたりした。照子は箆笥の中をガサガサと音をさせて何か捜して居た。

『行つて參りました。』と女中が餅菓子を大きな焼物の器に盛つて其處へ置くと、彼は、

『この鹿の子は旨さうだな。』と、パクリと一口に頬張つた。煙草を喫ひ過ぎた舌に、その冷い甘さが非常に快かつた。で、もう一つ食べようとすると、

『アラ、お止しよ、お腹が張つてしまふぢやないか。』と照子が言つた。『さあ出掛けやう、お待遠う様。——お里、お前これをお食べな。』

鹿の子と羊羹とが、明るい電燈の下でピカピカと光つてゐた。彼は唾をのむだ。
 「一つ喰べてやれ。」と照子は、羊羹をモグモグやりながら、彼の先へ玄関を出た。

T——軒の食堂は、未だ可成り賑つてゐた。うまく窓の側のテーブルが空いてゐたので二人はそれに向ひ合つて座を占めた。途中で照子が買つて呉れたスリーキヤッスルを咬へた彼は、それが随分短くなつてゐるにも關はずまだ喫して居たのを、照子に注意されて棄てた。

『テーブルのAを頂戴な。それからね、純ちゃんは飲むんでせう、何？』と照子は彼の方を見たが、彼が愚圖愚圖してゐるので直ぐに『ウキスキーを一つ。』とポイーに命じた。『妾、ベルモット。』

ポイーが立去ると彼は、

『酔つたつて知らないよ。』と苦々し氣に言つた。彼は「遊び」のことを考へて居た。その計畫が斯んな餘計な事にムザムザと破壊されて行くのを思ふと残念で堪らない、と思ふと遊びなんかといふことよりも實際に書物も買ひたくなつて來たことに——軽く驚いた。

『一體今日は何處の歸りさ。』

『まあ、そいつは言はないことにして置かうよ。』

『いい加減なことを言つてら。——精々遊びでもしたら幾らか氣が利いて來るだらうに……』

『まあまあ……』

『嘘つき！』

『さうだよ。』

『チエツ、厭になつちまふ……。』

……彼は、どうしても遊びに行く、と決心した。第一さうした方面のテクニクを殆ど知らない事に非常な不便を感じた。

『何さ、未だ頭を刈らないぢやないの。此間あんなに妾から言はれたことを忘れちやつたの！ 厭だわ、こんなサ、ラミたいな頭の奴となんか一緒に歩くのは。』照子は二杯目の洋盃を殆ど空にして、頬のあたりから眼の周圍を赤くした。『第一柄にないわよ。』

日増に照子の莫迦さ加減が増長して來るのが目に見ゆることは、彼にとつては憐れ味を

垂れてやるべく痛快だつた。山下といふ男にも、とうに弄ばれてゐるのぢやないかしら、その方が餘程好い氣味だ——そんなことを、ふと考へると彼は何とも言へない快さを感じたりした。

『明日は必ずお刈りよ、でないともう何處へも伴れて行つてやらないよ。』
 オイオイ、二つや三つ年が上だと思つて餘り姉さん振るものぢやないよ、——斯う言つてやれ、と彼は腹の中で呟いてゐるにも關はらず、
 『さうだな。』と心細く答へてしまつた。……だが先程理髮店へ入らないでよかつた、とは思つた。

一杯をやつとのことで空けると、至つて酒に抵抗力の無い彼の内體は恰もブランコにでも乗つて居るかのやうにスーッと浮いたり沈んだりしてゐるやうな氣持になつた。こんなことで見透されては大變だ、と思つてゐる彼は辛うじて兩眼を見開いて、さうして鷹揚に煙草を喫した。頭はカツカツと熱くなつて、爪先の方は寒けを覺えた。

ボーイが來ると照子は、また彼の盃に酒を注がせた。未だそれが注ぎ終らないうちに彼は盃に指先を持つて行つた、もつと飲むのは當然のやうに。だが、彼は盃を撮むだつもり

だつたが指先が震へて、それを倒してしまつた。盃の首がコロリともげてしまつた。

『アラ、濟みません。』と照子はボーイに言つた。ボーイがテーブルを拭いてゐるとき、照子は如才なく、

『どうも濟みません。』と言ひながら、彼の足をギョッとふんづけた。

『直しますか?』

『どうぞ。』照子は輕やかに云つた。新しい盃になみなみと酒は注がれた。

間もなく二人は其處を出た。

そんなに機嫌を悪くする程のことではないのに、とフラフラする足取を踏み堪へながら彼は呟いた。

照子は彼からずつと離れて歩いて居た。彼は、どうかして照子の機嫌を直さなければならぬぞ、といふことだけをしきりに考へたあげく、悉く冗談にして笑ふことで取り返さう、と謀むだ彼は、

『照ちゃん、もう少しゆつくりお歩きよ。』とワザと照子の腹を知らない者のやうにして追

ひついた。

「顔から火が出さうだつた。」

返事があつたので、彼はいくらか安心した。

「粗相なんだから勘忍してお呉れよ、ねえ。」

「そんなことぢやないわよ。」

「へえ！ で、その御機嫌のななめならぬは？」と彼は口を開けて、無頓着さうな笑ひで

照子の眼を見た。

「テイクプがあれツばかりで好いと思つてゐるのかえ。」

「さうさう、そりや悪かつたね。」と彼は笑つた。

「どうして純ちゃんは、ちよつとした處へ行つても固くなるの？」

彼はヒヤリとした。さうして今になつて一刻前と餘りに打つて變つて饒舌になつてゐる自らを強く恥ぢた。折角愉快になりかかつた氣持がまた別な憂鬱になつた。

「僕は大分酔つてしまつたよ。」彼は初めてほんたうのことを言つた氣易さを覺えた。

「大體が意氣地が無いんだよ。フ、ツだ。」

「參つたよ。」

照子の機嫌は直ぐに癒つてしまつて、甘納豆が食べ度いから買つて來て呉れなどと言つて、彼を使役した。

「家へ歸るのも未だ少し早さうだね。」と彼は言つた。その癖彼は爪先が前へ出ない程草臥れて居た。それにしても何とかして照子に、此方の氣の利いた腕を示したかつたが、酒を飲むことだけは思つても堪へられなかつた。

「試験休みには田舎へ歸るんでせう。」勝ち誇つた照子はそんなことを云つた。「田舎の家には柿の木が何本あつたかしら？」

「何本あるかな。」

「いつかの秋、妾が行つた時純ちゃんは木へ登つて柿を取つて呉れたつけね。」

「そんなこともあつたかね。」

「ああ妾、柿が食べたくなつた。」

「馬鹿。——これからどうしよう、未だ早いね。」

「もう歸つて勉強でもした方が好くはなかつて。また落つこつたりしちや厭よ。」

「あんまりふざけるなよ。」
 「妾これで學校時分には……。」
 「その話も止めようや。——ちよいとM——座を覗かうか。」
 「をととひ見ちやつたわ。」
 「でもいいだらう、あの人が出るんだから。」
 「當づつぼうに行くのは厭さ。」と照子は時計を見て、「今ならいいかも知れない——ちやちよつとよ。」と言った。

立見場の止り木に凭り掛ると、彼はその時まで堪へに堪へた酔が一時に發して、思はずグタリと首垂れてしまった。ちよつと眼を閉ぢると何か夢のやうなものを見た。——
 「御覽よ。」照子に突ツつかれて、ふいと眼を開くと、舞臺では幡隨院長兵衛だか何だかが眼をむき出して不快な音を發してゐた。彼の眼は五分と保たれなかつた。其儘寢轉むでしまふことのみを欲してゐた。照子は肩掛で鼻の上をおさへて見てゐた。彼は兩足が自分のものでないやうな氣がした。

「××屋」——素晴らしい音響が耳許でグワンと響いて、彼は驚いて夢から醒めた。
 場内は森閑としてゐた。恐ろしく驚いたが、どうしてか彼は、これが當然でなければならぬのだ、といふやうなことを考へながら、キトンと舞臺の方を眺めてゐた。——次の瞬間彼は非常に大きな聲で、
 「大タチバナア」と怒鳴つた。
 「叱ッ」何處かでそんな聲がした。が、それよりも彼が驚いたことは、照子が素知らぬ風で、足音を忍ばせながらスタスタと出てゆく姿を認めたことであつた。
 大失策を演じてしまつたぞ、と彼は氣がついたので遠慮して、照子が外へ出てしまつたところを見計つて、——「酔つぱらつてゐやあがら。」などと言ふ聲を聞き棄てながら其處を立去つた。
 「お静かに願ひます。」段々のところでそんなことを云はれた。

橋のたもとに後ろ向きで、照子がしよんぼりと立つて居た。彼は怖る怖る照子の傍へ近寄つて行つた。よく、まあ待つてゐて呉れたね、待つてゐて呉れるとは思はなかつたよ、

と斯う彼は言ひ度かつたが、——それは、歸られてしまったことよりも怖ろしいことに氣が附いた——間抜けツ！ とばかりにいきなり叱り飛ばされる……それを覺悟せずには居られなかつた。それは覺悟したが、居て呉れたことは嬉しくて堪らなかつた。——この臆病な驚愕で今迄の酔は少なくとも自らの意識の中では全く醒めてしまったことを感じた。——が、彼は、何と言つたらいいか、全く途方に暮れて、仕方がなく苦しくも何ともなかつたが、欄干にへたばりつくつと、

『ウーム、ウー、ウー苦しい。』と苦悶した。この呻き聲が如何にも苦しさに、自分の耳に響いたのは可笑しかつた。

『純ちゃん、純ちゃん、どうしたのよう。まあ困つたわね、……え、そんなに苦しいの、關はないから出るんなら出しておしまひよ、さ、さあ。』と、照子は甲斐甲斐しく彼の後ろへまはつて親切にも背中を叩いたり腹を押し上げたりし始めた。——彼は、餘りに豫期と反した事情で少なからず面喰つた。さうして「しめたぞ。」と思つた。

『苦しくつて堪らない。』彼は息も絶え絶えのやうな聲を發した。『ウーム、苦しいよう。』
『どうしたらいいだらう、困つちやつたわね、悪かつたわ妾が、ね勘忍して。』

『……………』

『吐いてしまつた方がいいわ。』

餘りギョウギョウと照子が下腹を壓すので、彼は反つて吐きたくもないものが不自然に込みあげて來さうになつて、酷い迷惑を感じた。

『未だ出ないの、——思ひ切つて……。指で舌を壓へなさい。』

照子の腕にこんな強い力が潜むでゐたか、と彼は思つた。彼は仕方がなく、指先を口の中へ入れるやうな眞似をして仰山にゲクゲクと喉を鳴らした。

『落ち着いたら少うし靜かにしてゐらつしやい、妾、水を貰つて來るから。』

『いいや、もう大丈夫だ。少し歩かう。』斯う言つて彼は欄干を離れると、自分ながら可笑しい程足がフラフラした、ちよつと踏み止まつて今度は故意に蹣跚とした。

『アラ、危いわよ。』照子は慌てて追ひ縋ると彼の片腕をしつかりと抱へ込むだ。『歩いた方がよささうなら——河岸の方へ歩かう、こんな態まゝで家へ歸つちやいけないわ。』
『ああ、さうして貰はう。』

戦ひに敗れた芝居の軍人のやうに、彼はその儘照子に凭り縋つてヨクヨクと歩いた。

「今日は全く妾が悪かつたのだけれど、純ちやんにはお酒が性に合はないんだから、もうこれからどんなことがあつても飲むだりしてはいけないよ。」

照子の顔が眼近く彼の顔を覗き込む時、彼の眼には涙が浮むでゐた。川端は、静かな夜で、黒い舟の艦の音が時たま聞えたばかりだつた。藝者を乗せた車が二三臺通り過ぎたりした。彼は、其方を見るのも厭だつた。

「家の阿母さんや叔母さん達は純ちやんのことを随分心配してゐるのだからね、ほんとにこれから氣を付けてね……」

「此方の敗北に附け入つて、」照子がそのお人好しのところを露骨に示し出すと、彼は、自分の厭にひねくれた、さうして莫迦氣で邪推深い愚かさを強く憎まずには居られなかつた。彼は叔母の事も考へ始めて居た。

「寒かないの？」照子は彼の肩を袖で覆うた。「苦しいの、癒つて？」

「どこか入る家はないかしら。」

「休み度いの。」

「もう少し飲み度いのだ。」彼は斯ういふ場合に我儘の言へる可能性を知つてゐた、丁度病

氣になつた時家人に對するやうに。

「飲むなんて冗談だけれど、すつかり醒まして行かないと困るから。」

「酔つてなんか居やしないよ——もう少し景氣よく飲みたいんだ。尤も照ちやんを相手ぢや始まらねえけれど……」

「まあまあ……」照子はどうしても彼に逆つて來なかつた。

「ほんたうに僕は酔つては居ないよ。」

「駄目よ。」どうしよう、と照子は呟いてゐた。

……………

それから間もなく照子はほんたうに怒つてしまつた。彼が餘りイ、氣になつて愚にもつかぬことを喋るので、照子は、愛想を盡すことに依つて脅迫して彼をなだめよう、としてゐるらしくも見えた。

「妾が家を持つたつて純ちやんなんて決して寄せつけないから。」などと言つた。

「歸るわ。」と照子は、電車の停留場の方へグングンと行かうとした。歸られては形無しだと彼は思つた。それに何だか、この儘照子を歸してしまつては照子に氣の毒なやうな氣が

してならなかつた。順調な氣持に直して歸してやり度い——そんな氣がした。

『ぢや酒なんか飲まないから。』到頭彼は斯う言つた。

『厭だね、限りがないわ……。』

『まあ、もう少し。』彼は急に元氣を出して照子の手を引つ張つた。

『みつともないわよ。』仕方がなく照子は笑ひながらついて來た。今度こそは、と彼は思つた。

『この公園で少し休まう、ならいいだらう。』

『お、厭だ、休む位なら何處かへ入らうよ、こんな處、なんかと怪しまれるわ。』

彼は酷く不自然にそれを打ち消した。

『ぢや兎に角ここを抜けて……僕途中迄送つて行かう、もう少し歩いた方が……醒めるから……ああ俺は矢張り酔つてゐるんだな、ハ、ハ、ハ、と彼は照子の機嫌を取る爲に大袈裟に笑つた。

『當り前さ。』照子は漸く彼に従つた。

廣小路の小さな公園で、三つ四つぼんやりと青い瓦斯燈が點つて居た。人影は、ひとつ

もなかつた。向うの寄席からしきりに客を呼むでゐるしやがれ聲が聞えた。——どういふ理由か好く解らなかつたが彼は夥しい焦燥を感じてゐた。さうしてそれは此處を通り過ぎてしまつたら、駄目なやうな氣がしてならなかつた。——彼は出来る限りゆつくり歩かうと試みてゐたが、妙に照子の氣持が此方と離れてゐるやうに思はれて——それに照子は倦怠の餘り白けてしまつたやうに少しも口を利かないのだつた。

『僕は初めて此處へ入つて見たよ。』と彼は尙も歩き出さずに言つた。

『妾だつて。』

『随分狭いね。』

『さうさ。』

『もう少し廣くしてもよささうなものだ。』

『何言つてるのさ。さつさとおいでよ。』

『ちよつとそこのベンチへ掛けようや。』

『厭だつてえのに！』

『照ちゃんは遊動圓木へ乗れるかい？』

「あんなもの他愛ないわ。」

「ぢや乗つかつて御覽よ。歩けるもんか。」

「知らないよ、そんなこと。」

「……………」彼は二本目の煙草に火を點けた。

「……………」

「僕がね、もうせんには機械體操のチャンピオンだつたことを、照ちやん知らなからう。」

「知らない。」

「ひとつ腕前の程をお目にかけてようか。」

「子供みたいなことを言つてら。」と照子は冷笑したが、ちよつとその中に好奇心の動いたらしいのに彼は氣附くと、わけもなく胸の躍つて來るのを覺えて『ちよいと見てゐて御覽よ。』と言ひながら帽子と外套とを照子に持たせて、其方に進み寄つた。踏臺の上に立つと怖ろしく緊張した自分の心を知つた。彼はペツと手の平に唾して、『いいかえ！』と言つた。暗がりの中に、ただ白く照子の顔がツマラなさうに此方を見てゐた。

鐵棒がよく見えないので飛びつくことが怖ろしかつたが、——彼は「ヤッ！」と言つて、

いきなり飛び上つた。極めて偶然に鐵棒が握られたやうな安心を覺えた。で、元氣を盛り返した彼は、肘掛を試みた。

「うまいだらう。」

「チェツ！」と、彼の眼の下の白い顔が言つた。

降りてしまつてはまた飛びつく時にオツカナイから、この儘でもう一つやつて見よう、と彼は思ひながら腕を伸して垂れさがつた。

彼は、尻上りを試みるべく徐ろに爪先を擧げ始めた時——ふと、足の上に光つてゐる星を見た。

「あしたまた好い天氣に違ひない。」

そんなことを思ひながら、その儘彼は尙もぢつと星を贖めた。

(十年三月)



父を賣る子

大正十三年七月三十日印刷
大正十三年八月六日發行

(定價五拾錢)

著作者

牧野信一

發行者

佐藤義亮

發行所

東京市牛込區矢來町三番地
新潮社

電話牛込

八八八八
〇〇〇〇
九八七六
番番番番

番二四七一(京東)替攝

印刷所

東京市小石川區西江戶川町
電話小石川五九二番

富士印刷株式會社

印刷者 佐々木俊一

—「公園へ行く道」了—

■ 新進作家叢書 ■

三十一篇以下新刊書目を掲ぐ

- | | | |
|----|---------|---------|
| 冊一 | 寺田屋騒動 | 三島章道氏著 |
| 冊二 | 二人の文學青年 | 新井紀一氏著 |
| 冊三 | 良人の貞操 | 瀧井孝作氏著 |
| 冊四 | 流 | 宮島資夫氏著 |
| 冊五 | 暖き手紙 | 藤森成吉氏著 |
| 冊六 | 感 | 謝加藤武雄氏著 |
| 冊七 | 蠹 | 戸川貞雄氏著 |
| 冊八 | 南 | 犬養健氏著 |

料理屋をいとなみながら早く水商賣から足を洗つてしまひたいと思つてゐる母とその娘達との間のいざこざを写したもので、手堅いあぶなげのない表現で、娘たちの生活の中へ、ぐんぐんと、へき進んで行つた手際は實際凡手でない。(大阪毎日評)

定價一冊五錢・郵送料六錢

